

## 時枝・服部論争の再考察（Ⅲ） 一言語研究の原点的問題として一

松 中 完 二

### 4. 時枝・服部論争

前回は、時枝誠記、服部四郎らによってなされた言語学的な視点での、時枝学説の是非と時枝によるソシュールの学説の解釈についての論争（本稿ではそれを第一次論争期と呼び表わした）について考察した。最終回となる今回は、1960年代に入って、構造主義隆盛の時代的背景も手伝って、哲学的見地から再び“時枝・服部論争”に光が当り始めた、いわゆる第二次論争期における論争の経緯を見ながら、全体を通して、この論争の問題の所在について見ていく。

#### 4・2 第二次論争期

1957年の服部四郎（1957<sup>b</sup>）の論を最後に、一旦は終息を見た“時枝・服部論争”であるが、この終息期間は長くは続かなかった。1960年代に入って、構造主義という学問体系が様々な分野で脚光を浴びる中、構造主義の生みの親であるソシュールとその学説の解釈に目が向けられることは当然かつ自然な流れであったと言えるであろう。しかしここでは、かつての“時枝・服部論争”に直接の視点が向くというよりはむしろ、時枝の言語過程説（特に時枝文法）を基に、文学理論を中心とした様々な議論が文学界、思想界等に飛び火する形となる。その最初が、1964年に杉山康彦が『文学』第32号に発表した「言語と文学」である。ここで杉山は、文学論の展開に際して、文学とは言語行為の具現化であるという視点から、持論

の説得性を時枝の学説に求め、次のように時枝学説の有効性を賛する。

“すでにのべたように言語とは外在的であると同時にその内化であるところの弁証法的行為である。ソシュールはこことここで思い違いをして、言語活動の総体（これこそが言語の本質）の研究を〈言語〉の研究に還元してしまったのだ。

時枝誠記はこのようなソシュールの言語観を言語道具説、言語構成観として拒否し、これに対し自らの言語過程説を対置した。氏は

如何なる人によっても語られもせず、読まれもせずして言語が存在していると考えられることは単に抽象的にしかいうことは出来ないのである。自然はこれを創造する主体を離れてもその存在を考えることが可能であるが、言語は何時如何なる場合に於いても、これを算出する主体を考えずしては、これを考えることが出来ない。更に厳密に言えば、言語は「語ったり」「読んだり」する活動それ自体であるということが出来るのである。

と言語を一つの主体的行為として、一つの心的過程としてとらえることを強調する。すなわちたとえばソシュールが、言語を概念と聴覚映像とが密接に結合され互に喚起しあう一つの外在的実存体としてとらえるのに対し、時枝はそれを概念が聴覚映像と連合すること自体、すなわちその概念作用そのものとしてとらえることを強調する。

これはまさしくソシュールの学の欠陥をつくものであり、それはソシュールが比較言語学、歴史言語学のように言語をたんなる自然としてとらえることを越え、その言語事実そのものをとらえようとした企図を大きく一歩押し進めたものであるといえよう。とくにそれは西欧の既成の方法を日本語に形式的に適用するに止るスコラスティックな従来の国語学をゆすぶって、日本語をその具体的事実においてとらえる道を拓いたという意味において画期的な意義をもつものである。(1964:10)”

この論を契機に、再び時枝学説を擁護する兆しが見え始める。そこでは特に、言語過程説における時枝文法を足掛かりにして、持論の有効性を主張する動きが起こる。こうした動きの最も大きなものとして注目に値するのが、当時の思想家、吉本隆明による時枝学説の擁護とも取れる記述である。1965年、吉本は自書『言語にとって美とはなにか』（1965a）において、自らの文学理論の有効性を時枝文法の詞と辞の区別に求める。ここで吉本は、時枝が“詞”、“辞”と呼んで区別したものを、自らの理論の中ではそ

れぞれ“指示表出”、“自己表出”と呼び表わし、多くの先人の理論と文学作品を抜粋しながら、次のように持論を展開する。

“言語における辞・詞の区別といい、客体的表現といい、主体的表現というものが、二分概念としてあるというよりも傾向性やアクセントとしてあるとかがえることができるし、また、文法的な類別はけっして本質的なものではなく、便覧または習慣的な約定以上のものも意味しないことが理解される。品詞の区別もまったく同様で、品詞概念の区別自体が本質的には不明瞭な境界しかもたないものだともみべきである。(1965<sup>a</sup>:54-55)”

そして、このように時枝文法に対して賛意を示す吉本は、時枝の言語過程説に対しても、次のように全面的にそれを賞賛する。

“まず、主体の意味作用に意味の根源をもとめた時枝言語学の一貫性と本質性とを賞賛しなければならないとおもう。わたしの読みえた範囲では、どんな言語学者も、これだけ本質的に意味の解明はなしえていないからである。対象にたいして主体の内部にきまった把握の仕方があらわれ、この把握の仕方が言語に表出されて意味をなすところではかんがえられている。[中 略] わたしたちが詩歌や文章をつくるさいの体験を内省してみると、まず主体のなかに対象にたいする意味作用があつて、それがつぎに言語にあらわれる、とはかんがえにくい。まず、おぼろ気な概念か、像か、ひとつの意識のアクセントがあつて、かかれる言語の意味は、かいてゆく過程につれてはじめて決定されてゆく。主体が意識としてまったく空っぽであつて言語が表現されることもなければ、(シュルレアリストの自動記述のばあいさえも) また、主体に意味作用の根源があつてそれが言語にうつされることもないのである。

こういう過程をもんだいとする難しさは別に論ずるとして、時枝誠記の意味の考察にはたくさんの示唆がかくされている。意味が内容的な素材的なもの自体ではなく、また、言語は写真が物をそのまま写すように、素材をそのまま表現するのではないというかんがえによく象徴されているように、俗説をやぶって主体のはたらきと言語の意味とのあいだに橋をかけようとする意図がはっきりとかたちをとっている。(1965<sup>a</sup>:63)”

しかし吉本のこうした賛同に対しては、すぐさま批判の声が上がる。その最初が、かつて時枝に正面から反論した大久保忠利である。大久保は1966年、『国語教育研究』第8号に「『言語にとって美とはなにか』を解説

する」を發表し、吉本の論の内容についてはもとより、時枝学説を鵜呑みにし、それに対して手放しで賛同する吉本の姿勢に対しても次のように非難する。

“ことに、吉本の論の欠点は基礎的な概念の無規定とゆれにあることがわかりかけた。論の最も重要な概念である「自己表出」と「指示表出」の二区分についても、極めてわかりにくい。[中 略] このように、吉本が、品詞分類にまで自己表出と指示表出とを適用しだすことは、右に見たように次元の混同と時枝的考えの無批判的援用という二重の誤り・混乱を残してしまっていることになった。時枝買いかぶりもいい所である。(1966a:149-154)”

また驚くべきは、自説を論拠として引き合いに出された当の時枝自身も、吉本の持論を展開するやり方に対して決して快く思わなかったことである。時枝は同年、『日本文学』誌上に「詞辞論の立場から見た吉本理論」を發表し、そこで次のようにその困惑ぶりを隠そうとはしない。

“吉本氏が、自己表出、指示表出なる語の概念規定をしていないので、私は、右の引用のままに、これを詞辞論の立場で理解した。ところが、右の引用の箇所の後とところで、

言語における辞・詞の区別といい、客体的表現といい、主体的表現というものが、二分概念としてあるというよりも傾向性やアクセントとしてあるとかがえることができるし、また、文法的な類別はけっして本質的なものではなく、便覧または習慣的な約定以上のものも意味しないことが理解される（五五べ）。

といていることに従うならば、これは詞辞論とは全く正反対の、指示表出と自己表出との連続論であり、重層論であり、前項に述べて来た、詞辞が次元を異にするとする論の否定であり、詞と辞の間に対応関係があるとする論の否定である。そこで問題は、著者が詞辞論と関係があると考えた指示表出と自己表出の概念が、どのようにして成立したものであるかを検討することが、さし当てる私の課題になって来るのである。[中 略] 自己表出と指示表出ということが、具体的には、どのような事実をいうのかは、明瞭に示されないままに、ここでは、それらの連続性と重層性とが説かれると同時に、品詞別との関連が説かれている。これは、甚だ唐突な問題の提出の仕方であって、自己表出、指示表出ということが、推論の基礎

になっている事柄であるのか、それとも、三浦つとむ氏や、時枝の品詞分類論のようなものが基礎になっているのか、その点が必ずしも明らかではない。吉本氏の論旨のままでは、時枝の詞辞論を取上げる地点に到達していないにも拘らずその到達していない道中で取上げたために混乱が生じたのではなかろうかと見られるのである。

実のところ、私は、吉本氏の著書を読むのに少なからず苦勞した。今でも、的確には、そのイメージが頭に浮かんで来ないような気がする。それが何に由来するのかを考えてみたのであるが、氏の論述には、他説の引用が非常に多い。他人の説は、あるところで自説と一致しているように見えて、実はその方向が全然異なっている場合すらあるのである。[中 略] 私が氏に期待したいことは、他説などにおかまいなしに、氏の論旨を厳密に追求、展開させることをやっていただきたいことである。私の詞・辞論などを引用することは、読者を昏迷に陥れるだけのものではないかを惧れるのである。(1966:67)”

こうした時枝自身の不賛成もあってか、時枝文法を背景に持論を展開しようとする吉本の姿勢には、様々な方面から反発が噴出する。同年の同誌には、時枝学説を擁護する杉山康彦が「言語の自立性について—吉本隆明における指示表出と自己表出—」という論文を発表し、次のように吉本の論を真っ向から否定する。

“言語、文章というものを、人間の自立の構造としてとらえるということは、たとえその自立という概念の理解に個人差はあれ、とにかく賛同する。しかし、言語、文章をそのようなものとしてとらえるためには武器としての理論が必要だ。吉本のこの著書がその理論化に成功しているとは思われない。指示表出、自己表出などという概念は言語、文章をそのようなものとしてとらえることにむしろブレーキをかけている。その仕事はだから彼の著書では星くずをちりばめたようなものとして終ってしまっている。著者も読者もすべからくその概念の呪縛から解かれなければならない。(1966:23)”

更に同誌には、大久保忠利の「吉本隆明の言語本質観は特異なものであるか」と題する論文も掲載されている。大久保はそこで、やはり時枝学説に対する批判を基にしながらも、『国語教育研究』第8号で展開した「『言語にとって美とはなにか』を解説する」の捕足という形で、次のように吉

本の理論構築の甘さを批判する（文中、大とは大久保自身を指している）。

“大が吉本について特に批判したいのは、つぎの点である、すなわち、そもそも自己表出・指示表出はパロール（言行為）次元での用語であるのに、ラング（共有語）次元での品詞分類の次元にその概念を吉本はズカズカと持ちこんでくることである。これはいけない。次元の区別を忘れていて、悪いけれど、吉本においても、「言語」の概念の下位区分の体系が確立していないからこうなるのだ。言行為にあっては、共有語として存在する「社会ラング」を各個人は「個人ラング」として分有し、その大脳での所有を基礎として、思考・通達に当り大脳に喚起しておこなうのである。そのとき語が選択的に喚起され、「文法則」によって「文」に総合される。さらに、文+文+文として思考内容が分析・総合される。これが言行為なのである。[中 略] 吉本の言っていることを解釈すれば、ある言語表現の、指示的内容、すなわち客観の指示を「意味」と呼び、表現者の意識の直接の表出を「価値」と呼んだということなのであろう。そしてここには認識・価値づけ・感情・感化性などを特に分離してひとまとめにそう命名したものと見ていいと思う。この二分法は、オグデン、リチャーズが言語の「指示的機能」と「喚情的機能」referential function, emotive function と二分、S・T・ハヤカワが言語の「情報的用法」と「感化的用法」informative use, affective use と二分したことを思い出させる。全く重なっているとは言えないが、大へんよく似た二分法であると言えるよう——だ。さらにサルトルの散文のコトバと詩のコトバの相違をも想起させる。大体、ここいらあたりに落つくのではないか。一体に、コトバ数の多いわりに、説明不十分というのが吉本の文章の特色で、ここにおのずから吉本の言語観そのものも表明されてしまっているようなのだ。[中 略] 送り手が自己の意識過程をとらえるためには「内観法」によらねばならないのだが、意識過程は必ずしもすべてが意識にのぼるとは限らず、また、意識を過程させつつ自分で側面から観察するというのも、普通の人間ではしにくい。どうしても解釈が加わる。ましてや、そこにある言語過程を逆算して表現者の意識過程を再現することは、読み手にあつての解釈・推定作業がその大部分をしめる。ところが、吉本には、そういう作業過程についての厳密さの自覚がなく、他の人が書いた文章を自分で勝手に表現過程を解釈・推定してのべているのに、それを表現者の過程そのものであるかの如く言いたるというソザツサがいたるところに出てくる。このような方法論的ソザツサは、またこの論そのものへの信頼度を著しく低下させる。もちろん、解釈作業の手段としては、それ意外にないであろうけれど、あくまでも「推定である」ことを自覚し、そう言明すべきなのである。(1966<sup>b</sup>:12-15)”

この他、吉本隆明に対する批判として、同じく1966年には竹内成明の「吉本隆明の言語論批判—意味と価値—」や平田武靖の「吉本隆明論の反省—世代論を軸として—」、大久保そりやの「吉本言語論の陥穽—そのナルキツソスの空間について」、藤井貞和の『『表現としての言語』論の形式』がある。またその後、吉本、時枝両者の論点をまとめたものとして、1974年には野村精一の「表現としての言語—吉本隆明と時枝誠記の遭遇と交渉」、川本茂雄の「喩と像—『言語にとって美とはなにか』憶え書き」がある。これらの批判の一端をのぞけば、竹内は、

“吉本が、現在のマルクス主義芸術論に不満であり、また様々の文学者の趣味の表白にすぎない個人的文学論にも同調できず、より本質的な文学論を立てようとした気持は、わたしにもよくわかっている。しかし自己表出にこだわるあまり、吉本は言語と文学を科学的にとらえていく視点を失ってしまったのではあるまいか。[中 略] 吉本は、その両方の傾向に反発しながら、結局はそれらの文学論のどこに問題があったかに気づけなかった。そして、すでにおかされてきたまちがいをもう一度繰り返そうとしたため、文学理論家としての彼は、作品それ自体に永遠の価値を求め、読者を無私してきた十九世紀の文学者と同じ位置に立ってしまったのだ。(1966:72)”

と述べ、大久保は、

“「自己表出」にしても「指示表出」にしても、それぞれ「意識活動」「言語体活動」の機能ないし属性と考えることによって明確に位置づけられるように思う。したがって、これらは、言語労働論において現実的な出発点とはなり得ないものであると、私は考える。(1966:117)”

と疑問を露にする。一方藤井は、

“吉本が「指示表出・自己表出」を「詞・辞」にかさねあわせたことは何としても間違いであると私はけんきょに指摘したい。(1966:62)”

と強く否定する。

吉本隆明が時枝学説に賛同を示し、持論の有効性を時枝文法の有効性と重ね合わせようとしたことは、様々な方面から批判の槍玉に挙げられる結果しか生まず、この一連の論議自体が噛み合うことは、ついになかった<sup>1)</sup>。しかしこの論議が、皮肉にも一方で“時枝・服部論争”の終結以来、およそ十年近い平静ののち、再び時枝の存在とその学説を大きくクローズアップさせる結果を招いたことは事実である。そしてそれがかつての“時枝・服部論争”へも世間の視点を向けさせることとなる。実際、こうした流れを受けて、1965年には丸山 静が『文学』7月号に「言語についての考察」を発表し、次のように“時枝・服部論争”について締めくくっている。

“時枝言語学は、ソシユール理論の批判によって成立してくるが、それは果して、ソシユールを正当に把握し、その上に立っての批判であったであろうか。私は、国家理論や歴史・社会の理論と同様、言語の考え方の問題も、戦前にまでさかのぼって、考え直さねばならないところが、いろいろあるのではないかとおもう。(1965<sup>b</sup>:96)”

また1966年には、1951年に『文学』に発表された大久保忠利の「時枝誠記氏のソシユール批判を再検討する一時枝氏「言語過程観」批判の序説として一」が一部加筆され、編集部による次のような書き出しで、児童言語研究会編の『国語教育研究』第9号に再録される。

“最近、一読総合法は誤って時枝誠記氏の「言語過程説」の実践化だと、いうことが言われている。甚だしい誤解である。事実と一致しないような発言は、ご本人の時枝氏にとってもご迷惑であろうし、またわたしたち児童言研にとってもじつに困ることである。[中 略]

児童言研は、時枝氏の国語学上の業績を評価すると同時に氏の言語観——「言語過程説」に対してはきびしい批判をしてきた。すでに、一五年前の一九五一年六月号『文学』に大久保忠利氏は『時枝誠記氏のソシユール批判を再検討する』を発表している。この論文の内容は児童言研会員の共通理解となり、言語観を支える基礎理論の一つとなった。現在でもこのことは変わっていない。[中 略] なお、大久保氏の前掲論文を同氏の許しを得てここに再録して読者の資に供したいと思う。(1966<sup>c</sup>:129)”



また再録の理由として、大久保自身はその附記において、次のように述べている。

“この小論をこの本に入れたのは、つぎの二つの理由からです、イ 時枝氏は『国語学原論』のその後の版でも、自説を訂正せず、学生たちがその不十分さに気づかずにソシユール批判のよりどころとする恐れのあること。ロ その後、時枝学説批判を志す人々にしばしば、この小論の復刻を求められ、同時に今日でも一つの参考になり得るものであると信ずること。(1966c:138)”

こうした動きと共に、時枝学説のみだけでなく、徐々にかつての“時枝・服部論争”にも再び世間の注目が向き始める。しかしそのような中、翌1967年に時枝誠記が他界してしまう。するとそれを機に、時枝の生前の偉業に対する追悼的な性質も含んだ形で、“時枝・服部論争”に再び光が当たり出す。時枝の没年と同じく1967年、岡田紀子が『理想』誌上に「言語過程説の再検討」と題する論文を発表し、ハイデガーを中心とした哲学的見地から時枝学説の意義について次のように述べる。

“ソシユールにとって言語の最初の事実とは、個人の言語行為に、習慣の総体、ラングの実現をみる言語学者の目から始まる。言語過程説にとっては、いわば第一に生きられるものが問題である。実際、これは見かけよりもずっと根本的な対立である。

結局この問題は、言語の拘束性と自由（創造性）という大問題へ私たちを導く。[中 略] まず第一に、ラングは、通俗的ないい方をすれば、語彙と統合のし方である文法を含んだものであるが、パロールはいわばそれを受け取るだけだし、文を作り出す時の働きである音と意味の両面における連合は、もちろん個人の心理的な働きであるといっても、もともとソシユールが述べているように体系に依存しているのだから、原理的に創造的なものはない。(1967:45-46)”

その後、1968年には、かつて全面的に時枝学説を擁護した三浦つとむが『文学』第36巻に「時枝誠記の言語過程説」と題する追悼論文を掲載し、特に時枝学説における文章論と文学論に焦点を置きながらその正当性を主

張する。また同誌には野村英夫の「ソシュールの解釈について一言語過程説をめぐる一」が掲載され、野村はそこで、かつての三浦つとむ（1951）、杉山康彦（1964）らの論を再び引き合いに出し、言語の主体性という問題について時枝とソシュールの双方の解釈の相違を掘り下げる。

そしてこうした流れは、構造主義の隆盛という時代的背景にも後押しされて、徐々にソシュール学説を擁護する形でソシュール学説の正しい解釈の試みへと重点を移していく。その最初の論が1970年に山内貴美夫が『中央公論』1月号に発表した「ソシュールと人間科学」である。山内はそこで、ソシュール学説の意義を次のように説明付ける。

“このように「言語」の周辺から規定にかかるソシュールは、内側からそれを考察するとき、他の人によって指摘されなかったと自身でいう二つの問題、つまり「単位」（ユニテ）、「同定」（イダンティテ）という問題を設定する。そして言語の問題に関しては、生物学、天文学、化学、史学などと違って、この単位をどこに求め、それをいかに画定するかという問題があることを示す。[中 略] ソシュール理論という科学は人間のどの部分をめざし、いかなる意味をもち、どのような方向にあるのか。このようにみえてくると、ソシュールが「言語」を「記号」として物性化したことは、記号研究によって社会の一部を研究することを可能にしたといえそうである。（1970:197-199）”

この他、ソシュール学説を促すものとして、同じく1970年には、『英語文学世界』3月号に掲載された三宅 鴻の「ソシュールの人間と学問」と、『中央公論』11月号に掲載された亀井 孝の「ソシュールへのいざない」がある。三宅は、

“ともかく「現代言語学」を語る場合に、ソシュールを抜くことは考えられない。[中 略] 日本に於てはソシュールは当時無名の青年小林英夫氏によって訳され（一九二八年、岡書院、改訳新版は岩波）、とくに国語学界に対して大きな影響を与えた。その具体的例は故橋本進吉教授の学問で、なお橋本教授にブルームフィールドがどう影響したかは知る由もないが、とにかくソシュールの影響は、ラングとパロール、共時と通時というソシュールの基本概念について特に顕著である。さらに前東京大学教授服部四

郎先生の学問は、おそらく十九世紀のパウルと、二十世紀のソシュールと、ブルームフィールドとを先達として独自の境地を開かれたもので、最近の意義素論においても、ある面からはソシュールからの発展も見られようかと思う。以上名を挙げた人々や学派は、もちろんソシュールの単なる亜流ではなく、すべてソシュールを(一つの)源として、新たに一党一派が開かれているのは壮観である。(1970:20-21)”

と述べ、ソシュール学説とその影響力について賞賛する。一方亀井は、

“ソシュールを批判しただけでは、それはなんら生産的にはならない。ただ、現代の言語学その遠景にはやはりソシュールが大きく立っている。言語の自然へたちかえってかんがえる、これをひとはわすれてはならないのである。言語そのものは自然ではないが、言語の自然は自然として混沌である。(1970:187)”

と述べてソシュール学説を肯定する。そして、こうしたソシュール学説を踏まえた上で、再び時枝学説に対する批判として、1971年に丸山 静が「言語理論について」を発表する。丸山はそこで構造主義の世界観から時枝のソシュール批判は、時枝自身のソシュール学説の誤認の上に成り立っているものであることを指摘する。このことについて丸山は、次の様に述べる。

“『国語学原論』の読者は誰でも知っているように、このあたりから時枝はいちいちソシュールを引合いに出し、ソシュール学説を批判し、それとの対比において自説を展開するという叙述の仕方を探っているが、そのようなことが何故必要になったのだろう。ひょっとすると、そのようにして問題がしらすらすのうちにすり替えられてゆくのではないだろうか。いったい、言語という「主体的経験」は、これを「客体的存在に置き換える」ことが出来ないものであるからこそ、「主体的経験」であったが、それでは、この「客体的存在に置き換える」ことのできないもの、つまり、対象化することのできないものを、どうして学問の「対象」とし、それを記述することができるだろうか。[中 略] 彼はいう、「言語研究の方法は、先ず対象である言語自体を観察することから始められねばなら」ず、「言語学の体系は、実に言語そのものの発見過程の理論的構成に他ならない」が、ソシュールにおいては、「はたして右の如き方法が守られているであ

ろうか」(六〇-六一)と。そういつて時枝は、「言語活動のなかに、それ自身一体なるべき単位要素を求めようとする」ソシュールの態度は、対象の忠実な観察ではなくて、「既に対象の考察以前に於いて、対象に対して自然科学的な原子的構成観を以て臨んでいることを示すものである」(六一)という。

それゆえ、問題は要するに、ソシュールの発見したシニフィエ (signe = signifiant + signifié) という単位が、自然科学的な「原子」のごとき単位であるかどうか、したがって「原子」のごとき「もの」であるかどうか、ソシュールの思考法が「自然科学的世界観」の枠にしばられた「客観的立場」を超えることができなかつたかどうかという点に要約される。

しかしながら、これはまったく、ソシュールにたいする時枝の誤解、誤読であるとおもう。[中 略] 結局、時枝の批判の要点は、ソシュールのいうところの言語の「単位」(聴覚映像+概念)は、両者が結合するという行為作用 (acte) = 「心的過程」そのものであるにもかかわらず、ソシュールはそれを外化し、客体化して、「もの」として捉えているというに尽きる。しかし、ソシュール自身は、そのような「もの」と「イデー」の近代的ディコトミーの枠のなかで、言語現象を眺めていたであろうか。たとえば、ソシュールが、「聴覚映像」と「概念」という用語を、それぞれ「シニフィアン」(signifiant)、「シニフィエ」(signifié)という語におき替えることを提案している、つぎのような箇所を、時枝はよく読んだことがあるだろうか。「[中 略] 吾々は、全体を指すには、「シニフィエ」という語を保存し、概念と聴覚映像とをそれぞれ「シニフィエ」と「シニフィアン」によって置き替えることを提案する。あとの二つのコトバは、その両者をたがいに区別し、あるいはその両者をその属する全体から区別する対立をハッキリさせるといふ利点を持っている。」(Cours.九九頁) [中 略] 時枝が過去の国語学のあり方をふりかえって、それを「自立」させようとしたとき、おそらく彼は正しかった。また言語現象を反省して、それが自然科学的方法によって把握できないものだと気づいたとき、その直観は正しかった、しかし、そのときこそ、彼はもっとも危険な場所にさしかかっていたのではないか。そのように過去をぬぎすて、過去の武装をかなぐりすてるとき、ほんとうに自分に残るものは何なのか。曰く「主体的体験」、曰く「心的過程」、しかし、「主体」とか「心」という概念ほど当てにならないものがあるだろうか。(1971:92-101)”

この時期になると、1955年から1958年にわたって発見されたソシュール自身の遺稿を直接解読し、それによって *Cours* の記述に見られた矛盾点が次々と修正され、それを踏まえた上でソシュールの思想を解釈する動きが

活発化してくる。そこで発見された遺稿はゴデル (R.Godel, 1957) とエン  
グラー (R.Engler, 1968) の書にまとめられている。また我が国では、丸  
山圭三郎がすでに1960年代からソシュールの原典とその遺稿の解説に着手  
し始め、その最初の成果を1971年5月、『理想』誌上に「ソシュールにおけ  
る体系の概念と二つの《構造》」と題する論文で発表する<sup>2)</sup>。そこで丸山  
は、かつて時枝が問題にした“langue”という術語とその概念について、  
ソシュール自身の遺稿を基に正しい解釈を施し、次のように結論付ける。

「ラングとは、ランガージュのもつ能力の社会的所産であり、この能力  
の行使を個人に許すべく社会が採り入れた、必要な契約の総体である」ラ  
ングは、一つの社会制度であって、ランガージュはこの社会生活を通して  
のみ実現される能力という点で、他の呼吸とか歩行とかいった本能的能力  
とははっきり区別される。[中 略] ラングとは「パロールの実践によっ  
て、同じ共同体に属する主体に預託された資材」なのである。[中 略]  
まずラングとは抽象であり、体系そのものである。体系はそれ自体で充足  
し、その固有の価値は、体系自身によってのみ決定される。ここでは、ラ  
ングとは一つの国語体を指すのではなく、言語のすべてのレベルについて  
語る事ができる。例えば、音素phonèmeはラングであり、その顕現化と  
しての音は、パロールである。形態においても、統辞においても、また意  
味の次元においても、それぞれ固有の法則の総体がラングであって、換言  
すれば、これは一つの抽象、人間のコミュニケーションの条件とも言えるで  
あろう。[中 略] ラングとは、従って一つのコードである。私たちは、こ  
のコードによってさまざまな生体験を分析し、発話の瞬間に必要な選択が  
可能になる。このコードを持つために、非言語的現実を言語に分節し、連  
続的世界を不連続の次元に止揚し、知覚されたものを認識の次元に高める  
ことができるのである。[中 略] ラングとはまた一つの《形態》<sup>フォルム</sup>であって、  
《物質的実体》<sup>シュヴァスチクス</sup>ではない。[中 略] 以上みてきたように、ソシュールのラ  
ング=パロールの対立は、第二の観点、すなわち《体系の概念》から捉え  
られるべきであり、これは二十世紀の諸科学に共通する方法論上の意味を  
持っていると考えられる。すなわち、構造的モデルを作りあげる方法がそ  
れであって、一言で言うならば、タクシノミーの否定である。(1971a: 29-32)”

長年議論の対象となってきたソシュールの“langue”概念の解釈につい  
ては、丸山のこの指摘によっておおよその解決を見る。そして丸山はソシ

ジュール学説における“langue”以外の問題の解決にも着手する。同年6月には、『フランス語学研究』に「Signe linguistique の恣意性をめぐって」と題する論文を発表し、そこでソシユール学説におけるもう一つの問題点であった言語記号の恣意性について、原典とソシユール自身の遺稿を基にした正確な解釈を施し、言語の自立性という観点から次の様に結論付ける。

“Signeはsignifiant、signifiéという二項から成るといよりは、むしろ、《signeは同時にsignifiantでありsignifiéである》と言うべきである。[中略] signeは、ことばの外にある意味や概念を表現する外的標識ではない。signeはそれ自体が意味であり表現であり、それがarticulerされた時に価値が生ずる。[中略] ことばは観念の表現ではなく、観念の方が言葉の産物なのである。(1971<sup>b</sup>:22-23)”

更に丸山は同年、『中央大学文学部紀要』第29号に「ソシユールにおけるパロールの概念—主体と構造の問題をめぐって—」という論文を発表し、ソシユール学説における“parole”概念の正しい解釈を施す。丸山はそこで、次のように“parole”概念を説明する。

“文化一般のすべてのレベルにおいてその潜在的な本質と顕在現象を分けた場合、前者がラングであり後者がパロールである。例えば言語の各レベルを対象とした時には、音韻論における音素（もしくはその下位要素である弁別特徴）がラングであり、その現動化としての物理音はパロールである。形態のレベルにおいても、統辞のレベルにおいても、また意味の次元においても、それぞれ固有の体系がラングであって、換言すれば、これは一つの関係の網であり人間のコミュニケーションの条件とも言えるであろう。これに反して、ある特定の瞬間に、特定の話し手によって実現されたものがパロールである。ラングという体系があってはじめてそれ自体は空気の振動に過ぎないパロール、紙の上のインクの汚点に過ぎないパロールが意味を生ずる。(1971<sup>c</sup>:55)”

そしてこの頃から、丸山を中心としたソシユールの遺稿の解説によって、“時枝・服部論争”そのものよりも、ソシユールの遺稿の直接の解説によるソシユール学説の意義をめぐるとの哲学的、記号学的な論が展開されていく。

その最初が、史実として発見されたソシュールの書翰の詳細をスリュサーレヴァがリトアニアの言語学雑誌に発表した文書を邦訳し、1971年6月に『東京経済大学人文自然科学論集』誌上に紹介した村田郁夫の「ボドウアン・ド・クルトネへのソシュールの書翰について」である。こうした流れの中で、ソシュール学説の解釈をめぐる賛否両論が飛びかうこととなる。そこで展開されたソシュール学説に対する批判としては、同じく1971年、田中利光の「ソシュールの言語理論に関する若干の考察—『変形文法』理論との関連で」がある。ここで田中は、ソシュールの“*langue*”、“*parole*”概念とチョムスキーの“*competence*”と“*performance*”という術語とその背景にある差異について明らかにする。そしてそれを追う形で、様々な視点からソシュール学説の不備を指摘する論文が発表される。そうした論文は、1972年だけでも野村英夫の「ソシュールにおける否定的なものについて」と泉邦寿の「ソシュールの言語記号論と若干の問題」、露崎初男の「ソシュール理論の限界とその有効性」の三本を数える。そのような中、特筆すべき事項としては、1971年に山内貴美夫訳による『ソシュール 言語学序説』の出版がある。これはソシュールの講義をまとめたリードランジェの講義ノート of 翻訳である。実はこの本訳書の出版が、後に“時枝・服部論争”とは別の所で繰り広げられるもう一つの論戦の火種となるものであった。

一方、ソシュール学説を擁護するものとしては、1972年、堀井令以知の「言語学と記号学」と、山内貴美夫の「記号子論 ソシュール理論展開のための粗描」がある。これらはどれも、ソシュール学説の正しい解釈を試みながら、その学説の意義と有効性を説いたものである。そのような中、“時枝・服部論争”とは趣を異にしながらも、言語学的に示唆深いもう一つの論争が起こる。それは、先述した山内貴美夫訳の『ソシュール 言語学序説』の翻訳の是非をめぐる、グロータースと山内の間のみで行われた論戦である。これは、グロータースが山内訳の『ソシュール 言語学序説』の翻訳の不備を取り上げたことに端を発する論戦である。これはグロ

ーターズ、山内間で交された一度きりの論戦で、その後の進展は見られなかった。しかしこの論戦は、言語学、特に翻訳の問題の視点からは、非常に示唆深いものであったと私は考えている。そこで、双方が一度だけ交した論戦の論点について軽く触れておきたい。

まず、1972年、グローターズが『国語学』第88号に「書評ソシュール著、山内貴美夫訳『言語学序説』」という小論を発表し、翻訳論の視点を持ち出しながら、山内訳の『ソシュール 言語学序説』の翻訳に対して次のように苦言を呈する。

“よく知られているように、翻訳には逐語訳と自由翻訳の二通りの方法がある。アメリカの言語学者E・ナイダは『翻訳のために』(1964)の中で、この二つの方法を比較して、「逐語訳は、もとの言語の文法形式をそのまま生かして、同じ語順を取ろうとする。そのため意味が通じなくなってしまう。言い換えると、原文の伝達内容を逐語的に翻訳すると、伝達そのものが妨げられるという悲しむべき結果に終わる」(pp.22-23)と言っている。残念ながら手許にある『言語学序説』の翻訳は、逐語訳である。[中 略]例えば、フランス語の*forme*は、形態論に於ては「形態」の意味であり、具体的に一つの語を指す場合には「語形」のことである。ソシュールは、この他に第三の意味で*forme*を用いていることがある。“leur combinaison produit une forme” (II R, p.38) という文は、山内氏は「(音と思考の)結合は一つの形態を生産する」(p.57)と訳している。Coursの中では“Cette combinaison produit une forme, non une substance” (p.157, p.169)となっており、これを小林氏は「この結合は形態を生み、実質を生むのではない」(p.150 又は p.162参照)と訳している。このほか『ソシュール 構造主義の原点』(福井・伊藤・丸山共訳) (p.154)では、「この結合は形態を生み出すのであって実質を生み出すのではない」と訳している。ここで注意したいのは、ソシュールは*forme*と*substance*の二つの語を対立させていることである。言い換えると、ソシュールはアリストテレスの概念を使っているのである。[中 略]結局、*forme*に対して、形態か形相かいずれか一方の訳語を選べば解決する、という問題ではないのである。ソシュールがアリストテレスの術語を用いたのは、言語の本質は思考の意図にあることを強調するためであった。ちなみに、R・ゴデルは『手稿出典』(R.279)に於て、ソシュールの使っている*substance*の意味は「知性の働きに関与しない存在」であると定義している。このような意味で用いられた*substance*に対立する、*forme*という術語の意味は非常に明確になる。再び繰り返せ



ば、言語と言う対象には「実体」は無い。(1972:136-135)”

この苦言に対して、同じく1972年に山内貴美夫は『国語学』第90号に「ソシユール言語学に寄せて グロータース氏への反論に代える」という小論を発表し、次のようにグロータースに反論する（文中、グロータースはグ氏と略して表わされる）。

“グ氏によるこのような翻訳論は、そもそも全体科学としてのソシユール言語学を、あたかも翻訳の問題がその主たるテーマでもあるかのように、持ち出さねばならない出発点に原因があると愚考する。[中 略] ひきつづきグ氏が、ナイダの翻訳のカテゴリーに当てはめて、拙訳を「逐語訳」としていることに触れておこう。ナイダはBible translatingなどをはじめとして、翻訳一般のことを論じているのであるが、ことを翻訳の点のみにしぼってしまうならば、われわれとしては、その結果失う代償のことを想起しておいてほしい、と私は申し述べたい。学術上の内容をもつものを、ある言語に訳出するとき、理解は原語と、その原語で表現されている科学の対象との、双方におよばなければならないだろう。[中 略] 私は原文と訳文の意味、すなわちイデーが等価であることを、「翻訳」の理念と考えている。自由訳が小手先で処理しているのでなければ、さいわいであるが、全篇この調子で訳出するならば、原文のもつ思想を、相当に低下させてしまうだろう。

さらに氏は、翻訳にさいして、言語学的体系のほかに、「文脈の体系」、そして「文化の体系」を考慮すべきだと言う。文脈の体系、文化の体系とはなにか。これこそ語の濫用いがいのものではない。氏がとくに指摘しているformeとsubstanceに関連して、ソシユールではそれがいかに位置づけられるか示したいと思う。[中 略] 他方、formeを「形相」とし、substanceを「質料」もしくは「実体」とすることについては、それで全部が解決するのであれば、それでよいと言いたい。[中 略] グ氏によれば、「フォルム」という語は、語形（改訳文中）であり、形相であり、形態となりうるものであった。ある語について、その場かぎりにめまぐるしく転変する訳語が頻出するような「翻訳」であれば、それは学術的な翻訳としては系統だったものでは言わねばならない。ここでもまた、用語一つを取っても、祖述者の一貫した学問的姿勢が問題となっているのであるから、翻訳は原典の全体と、できることならその歴史的位置に十分な配慮がなされているべきであると考える。(1972:126-128)”

このグロータースと山内貴美夫の論争は、直接“時枝・服部論争”を対象として展開されたものではない。そしてこの論争が、その後大きく発展することもなかった。しかし、この論争は根本的な部分で、翻訳という作業に半永久的に内包される言語学的、かつ普遍的問題を捉えている。すなわち、言語形式としての言葉とそれが指し示す意味、更には他言語へのその等価な転移という問題で、グロータースの指摘とそれに対する山内の反論は、時枝が“entités concrètes”＝「具体的実体」、*“langue”*＝「言語」、*“unité”*＝「単位」という訳語に寄りかかってソシュール学説の真意を読み誤った現象に対して、大久保忠利や服部四郎らが展開した論と同様の問題を投げかけている。ましてやグロータースが、そこで翻訳の有り様を取り上げ、その是非について意見を述べる様は、翻訳作業において永遠に解決され得ない問題をも示唆する点で、非常に興味深い。換言すれば、グロータースの指摘は、その根本において、我が国で古くから議論されてきた翻訳論とそこでの論議にも通じる性質を垣間見せる<sup>3)</sup>。そしてそれは、“時枝・服部論争”とも間接的につながりを持っている。なぜなら、“時枝・服部論争”は、本稿の中編でも述べたように、時枝のソシュール学説解釈が小林英夫による翻訳を基になされたものであり、それを契機に勃発した論争だからである。それ故にその問題の性質は、必然的に翻訳の問題と無縁ではない。

こうした中、ソシュール自身の遺稿の解釈を基に、翻訳による述語の理解とその問題という視点から時枝のソシュール学説解釈と服部のそれとの相違点を問い正したのが大橋保夫である。1973年に大橋は『みすず』第15巻に立て続けに「ソシュールと日本 服部・時枝言語過程説論争の再検討(上)・(下)」(1973<sup>a</sup>, 1973<sup>b</sup>)を發表し、そこで特に服部のソシュール学説の解釈を検討し、その誤りを訂正する。その上で、時枝、服部の双方の論点を、合理主義と経験主義の対立に還元する視点から洗い直す。大橋はそこで、次のように論を切り出す。

“[前 略] 言語過程説の出発点になったソシュール批判についてはCoursの読み方を誤っているとする指摘がいくつも出され、時枝自身は承服してはいないけれども、[中 略] 一般には議論は落着いたかのように思われている。

ところが実際には時枝誠記を批判した人々の読み方が正しいかというところ、けっしてそうとは言い切れないのである。(1973a:3-2)”

そして時枝のソシュール批判に止めを指したとされる服部四郎(1957<sup>b</sup>)の論文を取り上げ、そこで服部がおかしたソシュール学説における“entité”の解釈の誤りを正す。まず、服部の“ソシュールがその著*Cours de linguistique générale* (Paris, 1931<sup>3</sup>)の序説の19頁の脚注で、la langue n'est pas une entité 《langueは実存体ではない》とっておきながら、本文においてlangueに関連してentitéという単語を用いるのは、比喩的意味或いは転義において用いているのだ、と解釈するからである(1957<sup>b</sup>:2)”という陳述に対して、次のようにその解釈の誤りを正す。

“ソシュールはホイットニーや青年文法学派以前の、言語をそれ自体のうち<sup>ラング</sup>に定まった生長の機制をもつ動物のように見る言語観は斥けるが、言語を有機的体系として存在するものと見るので、新学派のように言語が<sup>ラング</sup>entitéであることを否定するのは行きすぎと考える。つまり「言語はentitéである」は青年文法学派までの考え方であり、しかもソシュールはそれを肯定しているのである。(自分自身の用語法としては、さらに一段つっこんで、言語記号をentitéとしているけれども)。したがって、序説の脚注と以下の本文との間にはなんの矛盾もなく、服部氏(および時枝)のような苦しい説明はなんら必要でない。[中 略] 服部四郎氏は、entitéという語の意味も誤解している。その理由の一つは、[中 略] 英語のentityの意味を援用してフランス語のentitéを解釈したことであろう。[中 略] 英語ではいま説明したフランス語の使い方のほかにかなり漠然と「もの」を指すのにentityを使うが、フランス語のentitéはそうではない。[中 略] すなわち、この語は言語にとって本質的なものを指し、原則的にはentité linguistiqueもしくはentité de la langueという形で使われる。*Cours*の中では、ソシュールの用語として言語に関して使われるかぎり、修飾語がついていなくても同じ意味である。そしてentité linguistiqueと呼ばれるのはまず言語記号であり、かつそれは、能記と所記が結合した形でとらえなければ本質性を

失い、entitéとは呼ばれない。だから音素や音節は「単位」unitéではあっても、entitéではないのである。記号体系としての言語にとって本質的な文法的諸手段も当然entitéであるが、記号がentité concrèteであるのに対してentité abstraiteと呼ばれる。「実存体」という訳語だけではこの本質的要素という意味が十分につかめないが、このことを理解すると『講義』の中のなぞめいた文はだいぶんわかりやすくなる。(1973a:10-13)”

また、服部の“langue”解釈については、次のように訂正する。

“ランゲージュから非本質的な部分を除くとラングが残る。ラングの本質的要素を追究すると言語記号になる（ラングの「抽象的実存体」としての文法もあるが、ソシユールは、その性質を突っこんで検討することはしていない）。言語記号の本質はなにか。それは能記と所記の結合であり、その結合は本質的に恣意性の上に成り立つ。そして記号の価値は記号の相互関係によってきまる。そこから、ラングの体系性の考え方が出て来る。[中略] このようなパースペクティヴがある以上、ソシユールがラングをもってランゲージュのessentielな部分である、と言うとき、それは、服部氏が訳しているように、（一七二ページ）「重要な」という風化した転義ではなくて、accidental、accessoireに対立する「本質的な」というこの語の本来の用法で使われているのである。[中略] 彼が言語学のobjetとしている「ラング」とは、つねに明瞭に単数定冠詞つきの普遍的なla langueであって個別言語の体系ではないことをはっきりさせなければならない。[中略] 服部氏の考えるような経験論的ラング観は「ソシユール理論のラングとは、全く無縁のものである」と時枝誠記が反論したのも不当ではないことがわかると同時に、時枝誠記いらい「ソシユールのラング」と言われているものが基本的な誤解の上に立っていることもはっきりするはずである。(1973b:16-18)”

こうしたフランス語の“langue”概念の解釈について、同年に篠沢秀夫が「言語活動の学の実存的基盤」と題する論文を『現代思想』11月号に発表し、次のようにその誤りを指摘する。

“ソシユールの<sup>ランゲージュ</sup>言語活動、<sup>ラング</sup>言語、<sup>パロール</sup>ことばという三水準を表わす用語は、フランス語に本来ある用法上の区別に、自然に従っていて見事である。一般には、<sup>ラング</sup>言語は、“国語”と訳せることが多い。これに国名の形容詞をつければ、例えばlangue française “フランス語”となる。ところが、ランガ

ージュの方には国名の形容詞はつけられない。一例を挙げれば、langage poli “ていねいな” というような品質形容詞がつく場合が若干あるだけで、一般には“ことばづかい”の意である。それから“毎日の”とか“視覚的”とかの限定をつけることができる。“日常言語”“視覚言語”と訳せる。日本語では、ランガージュも“言語”となることが多いのだ。既に述べたように、ソシユールは、“言語は異質で多様である”といっているからには、言語活動とは、人間一般がさまざまな言語を使ってことばを交わすことを指すことになる。人間一般というと統計学的事象のようだが、体系である、言語の個人的実行面であることばが現われるという意味では、言語活動という操作概念は必然的に個別的、時空的要素を含んで来るのに注目すべきである。くりかえしているが、これをソシユールは扱わなかった。しかるに、英語ではラングとランゲイジの別をたてることができず、日常的にはいずれもランゲイジであるし、日本語の“言語”も心理的、哲学的側面に逸脱しやす拡がりを持っている。(1973:208-209)”

一方、その他の論文に眼を移すと、同年には同じく『みすず』第15巻に野村英夫が『一般言語学講義』の“序文”を発表し、原典と遺稿と邦訳のずれといった観点から、小林英夫訳の『一般言語学講義』を問い直す。また野村英夫は同年、『現代思想』10月号に「ソシユールの一句をめぐって“一般言語学”と『一般言語学講義』の問題」を発表する。こうしたソシユール学説の真意の解釈をめぐる動きはとどまるところを知らず、そのような視点での論文として、1973年には『現代思想』10・11月号に掲載された川本茂雄の「Signifiéについて ソシユールの瞥見(上)(下)」が、次いで、1974年には『福岡大学人文論集』6巻に発表された樋口昌幸の「ソシユールに関する覚え書き」がある。

そして、こうした一連のソシユール学説解釈の流れに大きく影響力を持ち、かつその流れに完結性を持たせたのが丸山圭三郎によるソシユール学説の解釈を施した一連の論文の発表である。以下、一連の論文の順を追って示す。

- ・1974年「ソシユールと構造主義」
- ・1974年「メルロ＝ポンティとソシユール 語る主体への帰還」

- ・1975年「ソシユール研究ノート シーニュの恣意性をめぐって」
- ・1975年「ソシユール ソシユールをめぐる謎」
- ・1976年「言語における《意味》と《価値》の概念をめぐって」
- ・1976年「言語学的記号と言語記号」
- ・1977年「ソシユール『一般言語学講義』」
- ・1977年「貨幣と言語記号のアナロジー」

丸山のこうした研究成果は、ソシユール学説についての我が国で初めての専門的な書物（1981、1983<sup>b</sup>）として結実する。

そして1978年には月刊誌『月刊 言語』が大々的にソシユールの特集を組む。そこでは丸山圭 三郎の『「一般言語学講義」の基本概念』、小林英夫「日本におけるソシユールの影響」、前田英樹の「ソシユールと言語過程説〈その相違の本質〉」等、新たな視点から極めて有効なソシユール学説の解釈と時枝学説の解釈が施される。そこで丸山は、様々な誤認を生んだソシユール学説における術語、「ランゲージュ」、「ラング」、「パロール」について、次のようにその正しい解釈を施す。

“ソシユールは、それまであまりにも漠然と用いられてきたコトバという概念に目を据えて、まず言語学の科学的対象を厳密に規定し直そうと試みた。彼はまず人間のもつ普遍的な言語能力・抽象能力・カテゴリー化の能力およびその諸活動をランゲージュ langage とよび、個別言語社会で用いられている多種多様な国語体をラング langue とよんで、この二つを峻別した。前者はいわば《ヒトのコトバ》もしくは《言語能力・言語活動》とも訳せる術語で、これこそ人間を他の動物から截然と分かつ文化の根底に見られる、生得の普遍的潜在的能力である。後者は、《言語》という訳があてられる概念で、ランゲージュがそれぞれ個別の社会において顕現されたものであり、その社会固有の独自の構造をもった制度である。〔中 略〕ソシユールは、「ラングとは、ランゲージュのもつ能力の社会的所産であり、この能力の行使を個人に許すべく社会が採り入れた、必要な契約の総体である」と言っている。ラングは、一つの社会制度であって、ランゲージュなる生得の能力もこの社会生活を通してのみ実現されるという点で、他の呼吸とか歩行とかいった本能とははっきり区別されなければならない。

さて、ソシユールがランゲージュとラングを峻別した視点に立つ限り、

前者は潜在的な能力であるのに対し、後者は社会制度であった。[中 略] すなわち、ある特定の言語にあつては、音声の組み合わせ方、語の作り方、語同士の結びつき、語のもつ意味領域等々には一定の法則があり、この法則の総体がラングであつて、これはいわば超個人的な制度であり条件である。そうすると、現実の発話に現われた個々の言語行為とラングを同一視することはできない。ソシュールが、特定の話し手によって発せられた具体的音声の連続をパロール parole とよんで区別したのは、右のような考えからであつた。したがつてラングとパロールの区別という視点に立つと、今度は前者が潜在的構造であり後者はこれを顕在化し具体化したものと言うことにならう。(1978:3-5)”

また、同書における前田英樹の「ソシュールと“言語過程説”〈その相違の本質〉」では、前田はソシュールの研究姿勢と時枝の研究姿勢が共通するものである点を次のように指摘する。

“語る主体の意識のうちにあるもの、何らかの度合で感じられているもの、それが意義である。現実には具体的なものを言語の中で捉えるのは余り容易ではないが、しかしここではそれは、感じられているもの、何らかの度合において表意的なもの、に等しいものであると言えるだろう”(II R42)。言語において具体的なものとは、感じられているものことである。ここでは具体的単位は、語る主体が感じる「表意性の度合」に従つて画定される。単位画定のこの原理は、ソシュールの探究の唯一の方法へとつながつてゆく。すなわち「語る主体の印象がどうであるかを問う以外に(共時言語学の)方法はないひとつのことがらがいかなる範囲で語る主体の意識のなかに存在し、意味づけられるかを探究しなければならない。従つて唯一の見方もしくは方法は、語る主体によって感じられているものを観察することにある”(II R85)。

このように明言された「方法」は、ソシュールの探究の個性のなかで全く独自の生育を遂げることになるのだが、仮にこの生育を一時間問わないことにするならば、ここに述べられている方法こそ、言語過程説の方法であることが分かる。(1978:51-55)”

更に翌1979年には前田英樹の「言語における行為と差異—再びSAUS-SUREと時枝をめぐる—」が『フランス語学研究』に掲載され、前田はそこで時枝の解釈する「主体」概念とソシュール学説のそれについて次の

ように結論を下す。

“SAUSSUREの「主体」には、時枝の「主体」の透明さはどこにもない。前者の行為が「語られるかたまり」の差異化を通して、自己自身の混沌とした「思考」を差異化することにあるとすれば、後者の行為は「素材」の対象的な把握から概念化、音声化へと至る過程の往復にある。時枝におけるこのような言語行為が、SAUSSUREの言うパロール活動に対応するものをその最も本質的な部分として含んでいるのは、当然であろう。時枝にとっては言語の「素材」は、常に「主体」によって対象的に把握されるのであり、「主体」はこの「素材」の変質作用そのものから何の影響も受けることのない地位にいる。[中略]時枝とSAUSSUREにおける「主体」観の違いは、langue——paroleの区別から生じるところか、むしろこの区別の有無を決定したもののこそ、「主体」とその行為に関する彼等の相異なる考察だったと言えるだろう。(1979:63-64)”

そうして翌1980年には、月刊誌『現代思想』が丸々一冊にわたってソシユールの特集を組む。ここで丸山は、ソシユール学説における“unité”という術語の解釈を例に挙げ、そこで時枝のソシユール学説の解釈が小林訳によって引き起こされた誤認であることを、次のように指摘する。

“ところで、unitéを一律に「単位」と訳すことには、小林氏の方にもまったく問題がないとは言いきれない。時枝氏が批判の対象としてとりあげたソシユールの文は、その註からも明らかなように、次の小林訳であった。

言語活動は、全体として見れば、多様であり混質的である。[...]それは人間の現象のいかなる部類にも収めることが出来ない。その単位を引出すべからぬからである。(『言語学原論』一九ページ)

服部氏がentitéの意味を原語の辞典で示したのにならってunitéの意味を調べてみると、大別して次の二種類があるあることがわかる。一つは、「同一性、統一性」にあたるものであり、二番目は「単位（同質のものからなる全体の構成要素、あるいは大きさなどを測定する一定の尺度となる大きさ）」であり、英語ではそれぞれunity, unitという別の語によって表わされる概念である。小林氏の訳した箇所では用いられているunitéは、「統一性」という意味なのであって、ちなみにパスキンの英訳を参照すると、正しくunityが当てられている。(…; we cannot put it into any category of human facts, for we cannot discover its unity.)



ここでこれ以上他の部分の訳文を検討して誤訳をあげつらうつもりはない。先ほどもくりかえし述べたように、日本における特異な現象として、翻訳の問題を洗い出さない限り、ソシュールの思想はおろか、『講義』の正確な読み方さえ出来ないという事実と時枝氏の批判をうのみにして原典を読まずにソシュール批判の立場を取る危険性が、現実存在したし、いまだに存在しているということを指摘するにとどめて、先に進もう。(1980:86)”

このような、ソシュール学説の正しい解釈と理解という流れは、前述した丸山の二冊の書物(1981、1983b)によって完結を見る。しかしその後も丸山は精力的に、哲学的、観念論的視点から、ソシュールの学説とその意義を様々な形で発表していく。そこでは、1982年に『思想』3月号に竹内芳郎との対談形式で発表された「言語・記号・社会—『文化の理論のために』と『ソシュールの思想』をめぐって—」、同じく1982年に『国文学』6月号に掲載された*Cours*の紹介的文章「一般言語学講義」、1983年に『言語生活』1月号に掲載された「ソシュールとチェス」、1984年に『思想』4月号に発表された「〈現前の記号学〉の解体」、同じく同書に廣松 渉との対談形式で発表された「言語・意味・物象—構造主義を超えて—」、同年の『理想』11月号に高橋允昭・篠原資明との対談形式で発表された「デリダの哲学」がある。こうした真のソシュール学説の解釈という流れは、丸山が中心となって編纂したソシュールに関する一冊の辞典(1985)となって完成される。そして、これら丸山の一連の論文で示されたソシュール学説の正しい解釈と、その上に立った時枝、服部の『講義』における術語解釈の是非が検討され、“時枝・服部論争”の第二次論争期は、構造主義とソシュール学説解釈の隆盛という時代的背景の中、静かに幕を閉じる。

## 5. 論点の考察

ここで、“時枝・服部論争”の論点の流れをまとめれば、次のような関係と性質を見出す。

- ・ ソシユール学説擁護派……佐藤喜代治、服部四郎、風間力三、  
大久保忠利、黒岩駒男、門前真一等

これらの批判で共通するものは、時枝学説でのラングの否定により、それが主観的心理主義に陥ってしまっている危険性を説きながら、それがそのまま時枝学説が誤りであると帰結する傾向が強く見られる。

- ・ 時枝学説擁護派……時枝誠記、三浦つとむ、杉山康彦、  
野村英夫、吉本隆明等

これらの批判で共通するものは、ソシユール学説を觀念論的合理主義として非難することで時枝学説の有効性を主張しながら、時枝自身は省くとしても、自論を時枝学説に重ね合わせることで自論の説得性をそこに求めようとする傾向が強い。

ここまでの双方の論の流れをまとめれば、二つの問題が存在する。すなわちそれは、ソシユールの思想をめぐる解釈の相違と、それを表す術語の翻訳という問題である。時枝のソシユール学説への異論が全て小林訳による術語とそこでの概念の解釈に基づくものであり、それが丸山らによる原典と遺稿の直接的な解読によって徐々に正しい解釈へと導かれていったのは先に見た通りである。しかし時枝の誤認を引き起こした根本的問題は、*Cours*における術語の翻訳にあると考えられる。ここではその二点の、特に第一次論争期における後者の問題に重点を置いて整理する。

### 5・1 思想解釈の相違

これはその性質上、ややもすると哲学的、觀念論的な議論に陥りやすい

性質を伴うが、それでもソシユール学説の精神を凝縮するものである。ここに関しては服部の論では解決を見る。更には丸山圭三郎らの微に入り細を穿つような研究成果により、ソシユール学説中の術語とその概念についての解釈は、より哲学的な観点から、第二次論争期の中心的問題として引き継がれて行くが、ここでは特にそれは問題としない。

ただし、時枝が誤認したソシユールの“langue”という概念の正確な解釈については、前述した丸山の解釈(1971a:29-32)を基に、再びここで整理しておく。ソシユールの言う“langue”とは、全ての体系としての意味を持っている。この点について丸山は次のように述べる。

“ソシユールの体系は、何よりもまず価値の体系である。そこでは、自然的、絶対的特性によって定義される個々の要素が寄り集まって全体を作るのではなく、全体との関連と、他の要素との相互関係の中ではじめて個の価値が生ずる。しかも、ラングなる体系は、自然の潜在構造の反映ないし敷き写しではなく、人間の歴史、社会的実践によってはじめて決定される価値の体系、換言すれば既成の事物がどう配置されどう関係付けられているかというのではなく、もともと単位という客観的な実体は存在しない体系なのである。[中 略] ソシユールの体系の概念は、タクシノミーの背後にあるアトミスムの強い否定でもある。出発すべきは常に全体からであり、全体は個の算術的総和ではない(1981:93-95)”

こうした“langue”概念の正確な解釈について、丸山は(1971a:29-32)で行った自らの説明を、次のように敷衍している(この解説は、一部簡略化して1985:67にも再録されている)。

“この、コトバの本質という点から捉えられた《構成原理》としてのラングとは、一つの国語体をさすのでもなくればその一般化でもない。何よりも、言語のあらゆるレヴェルについて語る事ができるのが、その証拠である。例えば、《音素 phonème》は音韻論レヴェルでのラングであり、その顕現化としての物理音はパロールである。形態論のレヴェルでは《形態素 morphème》が、意味論のレヴェルでは《意味素 sème》が、それぞれのラングであり、このラングを「言語」と訳すことができないのは、以上の例のみからも領かれることであろう。言語を離れても、このラングは有効な概念装置として機能する。我々は《神話素》、《物語素》といった-émique

(本質的な関係の網の視点)を語ることができ、それらは-étique (現象的  
顕現、物理的材質)と対立させることができる。当然、この第三のラング  
に対置させられるパロールは、先に見た第一のパロールであって、副次的、  
非本質的なものである。(1981:90-91)”

筆者自身、本論文の (I) において、“彼 (ソシュール) が打ち立てた  
構造主義言語学と称される学問は、哲学や心理学とも結び付き、様々な分  
野で大きな発展を遂げてきた (松中、2005:109)” と述べたが、こうした  
“langue” の概念こそが、ソシュールの学説を言語学のみならず、その他  
の関連領域と有効に結びつけた一番の要素なのである。

時枝とソシュールの言語研究に対する姿勢は、言い換えれば、言語を静  
的なものとして捉えるか動的なものとして捉えるかという視点の違いに帰  
依する。

同様の指摘は、次の釘貫 亨 (2007:123-124) にも見られる。

“時枝は、ソシュールの理論を「構成主義的」と批判し、言語を思  
考の表現過程および理解過程とする行動主義的言語観を主張する。言語を  
静的「存在」と捉えるか、動的「行為」として捉えるかの論争は、哲学者  
や言語学者を悩ませてきた永遠の難題でもあるが、日本ではこの議論がソ  
シュール学説を論議する過程で行われた。[中 略] 時枝によれば、「概念  
と聴覚映像が結合したラング」(注：これはラングではなく記号 *signe* の誤  
り、このような初歩的な間違いによって時枝は孤立した) は、構成主義的  
言語観によるものであり、記号を实体として認識しようとする限り、構成  
要素は個別科学的分析の中に分散、解消されてしまうだろう。時枝は、言  
語を概念と聴覚映像の同時並列的結合と捉えるのではなく、言語全体を表  
現過程、理解過程として捉えることによって概念や音声を統一的に把握す  
ることが出来るとした。”

ソシュール自身も言語が動的なものであることは認めた上で、それを科  
学的研究対象とするための静的な基準をどこに求めるべきかという一つの  
答えが “langue” であった。しかし時枝は、言語学において、“langue” と  
いう仮説の上に立つことで成立する概念を否定し、具体的経験から導かれ

た言語過程説という自説の有効性を声高に主張したのである。時枝のこうした批判の姿勢は、釘貫 亨(2007:125-126)によれば、フッサールの哲学に深く傾倒していたことに由来するそうであるが、それを認めた上でも、ソシュール学説における“langue”の正当性や、時枝の言語過程説における「過程」概念の正当性までも否定し得る正当な理由にはならない。ややもすれば、ソシュールの学説における「現象」概念と時枝の「過程」概念が、同一の対象を指している可能性は極めて高いからである。事実、言語とは“une entité psychique (小林英夫訳「心的実存体」)”ではなく、話者と聴者の間に成り立つ「行為」とその「過程」によって決定され得るのであるとする時枝学説の出発点が、原資料によって示されたソシュールの言語研究の出発点と酷似していることは、疑いようのない事実である<sup>4)</sup>。それを裏付けるかのように、後年、*Cours*の訳者である小林英夫は時枝との邂逅を次の様に語っている。

“かれの有名な言語過程説の解説や批判を今ここでおこなうつもりはない。ただここで明らかにしておきたいことは、その出産の秘密である。結果においてたとえ消極的であろうとも、右の意味で、かれもまたソシュールの影響下にあることは認めざるをえないところである。[中 略] ちなみに言語の成立をもっぱら個人心理学的に考えたところにも、時枝説は少壮文法学派の理論的代表者ヘルマン・パウエルに復帰した観がある。(1978:48-49)”

小林のこの言葉は、時枝とソシュールの研究姿勢が共に同じ土壌にあったことを如実に物語っている。

## 5・2 訳語の問題

時枝が批判の対象として取り上げたソシュールの学説は、小林訳を基にしてなされたものであった<sup>5)</sup>。そしてそこでは、かつて服部が指摘したように(1957b:7-10)、そもそも“langue”に「言語」という訳語を当てたこ

とが、問題の大きな要素であることは、これまでの論争の流れからも否定し得ない事実である。こうした訳語の是非に対して、磯谷 孝は次のように述べる。

“ラング、パロール、ランゲージュの三分法は、先に述べたように、小林氏によって、それぞれ言語、言、言語活動と訳され、この訳語は一応定着した。このうち、一番おさまりのよいのはラング＝言語であり、パロールとなると少々厄介で、言ではなんとなく馴染みがないので、発話にしたり、言葉にしたり、ことば、コトバ、ことば、コトバなど色々工夫がなされた。[中 略] 欧米語にはどうやらラング、パロールの二分法に対応するものがある、たとえば英語ではlanguageとspeech (実際、A.ガーディナーがその区分を用いている)、ドイツ語ではSpracheとRede、ロシア語ではヤズイクとレーチがそれに当たる。[中 略] ところが、フランスでレヴィ＝ストロースが出現し、構造主義的な記号論研究が起こってから事態が変わった。彼らが研究対象とする言語とはラングではなくてランゲージュだったのである。それ以後ラング＝言語だけでは用が足りなくなってしまった。訳書には言語、言語体、言語体系などが登場するようになる。[中 略] ソシュールのラング、ランゲージュ、パロールという三分法は、全くフランス語の自然な発想であり、この発想にもとづいてソシュールはなにはさておいてもラングを研究対象とする言語学を建設しようとした。それを足場にして、戦後、フランス人たちは現実と言語のかかわりあいの産物ともいべきランゲージュの構造を解きほぐそうとしたのである。[中 略] ラングはいわば文法規則のようなもので、現実の質を反映しにくい、ランゲージュはラングが現実において使用されたものであり (逆に、ラングがランゲージュの抽象というほうが正しいのかもしれない)、現実と相関し、現実の質を反映する。そこで現実を分析しようとするときには、現実そのものは混沌としたものであるから、現実についての言語であるランゲージュを取りあげ、これをラングの研究で得られた諸原理、諸方法ももちいて分析すればよいということになるのである。[中 略] 英語では、languageとspeechという便利な語があり、[中 略] これは、一応、ソシュール言語学のラング、パロールに対応している。これら二つの対応が成り立つことによってランゲージュは追い出されてしまったわけである。[中 略] 他方、マウロも指摘しているとおり、マルティネの言語学辞典 (大修館) の術語索引では、language (英) には主にlangue、そしてlanguageが当てられており、speechには、discours、parlerそしてparoleが当てられている。[中 略] つまり、speechがパロールとランゲージュ、languageがラングとランゲージュにあたるという二つの解釈がここに存在するので

ある。(1980:224-233)”

“ソシユール言語学における、ラング、パロール、ランゲージュの三分法が、フランス語の言語構造そのものに負っていることはすでに述べたが、マウロの指摘は、ラングの概念そのものが、多分にフランス語そのもの(というよりも、ひょっとしたら、冠詞と、数という文法的カテゴリーをもつインド・ヨーロッパ語そのものの)構造に負っていることを明らかにする。言語*langue*は、フランス語では...*langue*、*une langue*、*la langue*、*les langues*、*langues*等の現れ方をする。このうち、*la langue*は、一方では「この、その言語」、を表わすと同時に、「そもそも言語というもの」といった絶対普遍概念を表わすことができる。つまり、冠詞と数の使い分けによって、任意の単語が普遍概念、個別概念、特称概念を表わしたりすることができるのである。(1980:249)”<sup>6)</sup>

事実、磯谷が指摘する通り、ソシユールにおけるラングの概念は、次の三つに分けられる。

一つ目は“*les langues*”と複数形で用いられる場合である。それは以下の例に見られるように、現存する諸言語の中の、対象となる複数個の言語を指す。

“*Les langues sémitiques expriment le rapport de substantif d'éterminant à substantif déterminé* [後 略] (1916:311) [斜体部筆者]”

“セミト諸語は定辞実体詞と被定辞実体詞との関係を、[中 略] たんなる並置によって表わす、[後 略] (1972:321) [下線部筆者]”

“*Quand on compare les langues sémantiques avec le protos émite reconstitué, on est frappé à première vue de la persistance de certains caractères*; (1916:315) [斜体部筆者]”

“セミト諸語と再建されたセミト原語とを比較したとき、ひとは一見してある種の特質の永続に眼を見張った; (1972:325) [下線部筆者]”

二つ目は“*les langues*”と単数形で用いられる場合である。これは“*les langues*”から帰納される言語の原理的体系を指している。例えば、以下の記述がそうである。

“*La langue*, distincte de la parole, est un objet qu'on peut étudier séparément. [中略] C'est au psychologue à déterminer la place exacte de la sémiologie; la tâche du linguiste est de ce qui fait de *la langue* un système spécial dans l'ensemble des faits sémiologiques. (1916:25-33) [斜体部筆者]”

“言語は、言とはことなり、切りはなして研究しうる対象である。[中略] 記号学の精密な位置を決定するのは心理学者の仕事である;言語学者のつとめは、言語をして記号学的事実の総体のうちで特殊の体系たらしめるものを、定義するにある。(1972:21) [下線部筆者]”

“*La langue*, au contraire, est un tout en soi et un principe de classification. (1916:25) [斜体部筆者]”

“これに反して、言語はそれじしん全体であり、分類原理である。(1972:21) [下線部筆者]”

“*la langue* n'est pas une institution sociale en tous points semblables aux autres [中略] *la langue* est une convention, et la nature du signe dont on est convenu est indifférente. (1916:26) [斜体部筆者]”

“言語は一つの制約であり、人びとのとりきめた記号の性質のいかんは、問う必要がない。(1972:22) [下線部筆者]”

そして三つ目は、同じく“*la langue*”と単数形で用いられる場合であるが、これは最初に見た特定の国語体を指すものでも、二番目に見た一つの国語体の総体化でもなく、社会や文化総体を一つの体系として捉える人間的認識として用いられる概念である。こうした“*langue*”概念の使用は、主にリードランジェの講義ノートから発見されている。そしてここでの“*langue*”概念の解釈は、先に見た丸山圭三郎の、

“まずラングとは抽象であり、体系そのものである。体系はそれ自体で充足し、その固有の価値は、体系自身によってのみ決定される。ここでは、ラングとは一つの国語体を指すのではなく、言語のすべてのレベルについて語ることができる。例えば、音素 *phonème* はラングであり、その顕現化としての音は、パロールである。形態においても、統辞においても、また意味の次元においても、それぞれ固有の法則の総体がラングであって、



換言すれば、これは一つの抽象、人間のコミュニケーションの条件とも言えるであろう。[中 略] ラングとは、従って一つのコードである。私たちは、このコードによってさまざまな生体験を分析し、発話の瞬間に必要な選択が可能になる。このコードを持つために、非言語的現実を言語に分節し、連続的世界を不連続の次元に止揚し、されたものをの次元に高めることができるのである。[中 略] ラングとはまた一つの《形態》であって、《物質的実体》ではない。(1971a:31)”

という解説につながっていく<sup>7)</sup>。

こうした概念とソシユールがそこに到達した経緯について、松澤和宏(2007b:138-142)は、次のように主張する。

“しかし人間の自然的能力としてのランゲージュ language (言語能力) の研究と諸言語 les langues の研究との関係が問題となるやいなや、あらたな問いかけの場が拓けてくる。ソシユールは二つの研究が相互に補い合って豊かなものになると強調しているように一見すると思えるのだが、注意深く読むならば、諸言語の研究がランゲージュの一般的研究よりも優先されるべきだと説いていることが判明する。[中 略]

ソシユールは最初の段落では、先天的な言語能力の実現、すなわち発話の実施にアプローチするには、具体的な諸言語 les langues の研究を通してからしか可能ではないと説いている。また二番目の段落では条件法(もし～ならば、～であろう)を用いているために、ランゲージュの一般的研究の重要性を説いているものの、緩和されていることに留意すべきであろう。[中 略]

なぜソシユールは言語の科学の将来はランゲージュの研究と諸言語の研究の相互交流と往還にあるといえないのであろうか。J.フェールも指摘しているように、ソシユールが諸言語の研究の優位を強調しているために、われわれは困惑を覚えずを得ない。就任講演の草稿の注意深い読解によって、ランゲージュと諸言語との関係の問題化においてソシユールが、ランゲージュ(言語能力)に着目する言語学的自然主義と諸言語の歴史を研究する歴史言語学の批判という迂回を経ながら、いずれの学派によっても考えられなかった単数形のラング la langue という概念を築いていく過程を垣間見ることができるだろう。[中 略]

こうして一方では、先天的なランゲージュの研究に対しては、言語を人間の歴史・社会に属するものという立場からその限界を指摘する。他方では、諸言語の歴史とは歴史言語学者の多くが考えるような人間の意志によ

る歴史ではなく、ほとんど無意識的なものであり、また言語は個人的なものというよりもむしろ匿名的な性格をもっているとソシュールは述べて、「歴史」概念に対して注意を喚起している。

そこで人類に普遍的な言語能力の研究と多様な諸言語の歴史的研究の対立を超えるべくソシュールは、ラング概念を練り上げていく。ソシュールが「ランゲージュ」「諸言語」「ある一つの言語」との葛藤のなかで「言語」概念が誕生する現場を草稿第20葉が鮮やかに示している。[中 略]

ソシュールはランゲージュと諸言語との狭間で、「言語能力」のように人類にとって普遍的でありながら、同時に「諸言語」のように具体的な事実でもあるものとして、すなわち具体的普遍性 *universalité concrete* の地平でラング (*la langue* 言語) という概念を練り上げていくのである。ソシュールは弟子の手による『一般言語学講義』のように、ラング概念は断定的に課せられるのではなく、具体的普遍性の地平で時間軸における間断なき言葉の伝承において姿を顕してくる。通説に反して、ラング概念は共時論的な展望において現れてくるのではなく、時空間にわたる言葉の伝承の次元で登場してくる。ソシュールは「或る言語」*une langue*、「諸言語」*les langues*、「言語活動」*language*、そして「言語ラング」*la langue* の間で逡巡したあげく、ラング概念に到達している。”

また加賀野井秀一(2007:26)は、三つの概念の性質の差異について、次のような説明を加える。

“まずランゲージュは、一般的に「言語」と訳せばいいが、ありとあらゆる言語、言語活動、言語能力をふくめたものの総称として使われる。話し言葉も、書き言葉も、身体言語も、さらに(ソシュールはそこまで言うてはいないが)犬のほえ方だって、ミツバチのダンスだって、すべてをひっくるめてランゲージュと呼ぶことができるだろう。そのランゲージュを二分すると、一方がラング、他方がパロールになる。

ラングは「言語体(系)」と訳するのがよろしかろうが、およそ「日本語」「英語」など、いわゆる国語と呼ばれるものをイメージすればいい。それらは語彙的にも文法的にも一つの体系をなしていて、語彙体系は、国語辞典からおしはかることができるし、文法体系もまた、その国語の文法書の全体から見当がつく。もちろん、こうした国語の下位区分とも言うべき方言・俚言、ある種の階層語・業界語なども、それが体系として捉えられるかぎりでは、これまたラングであるということになる。

ちなみに、ラングには「レ・ラング *les langues*」のように複数形で使われるものと、「ラ・ラング *la langue*」のように単数形で使われるものと

がある。複数の場合には、日本語・英語のような個々のラングの集合体が念頭におかれており、単数の場合には、そうした集合体の一般化というか抽象化というか、最大公約数的なものが考えられていると見てさしつかえない。

最後にパロールは、個々人がすあべったり書いたりする具体的な言語であり、「言葉」とでも訳しておけばいいだろうか。たとえてみれば、ラングは暗号解読用の「コード」、パロールはそのコードを使って送受信される具体的な「メッセージ」のようなものである。”

時枝と服部らの議論は、ソシユールの原典の複雑さとその時代的制約という性質から、根本的な論点の認識が歪められていたことは否めない。しかしそれを省いて考えたとしても、“時枝・服部論争”の根底にあった根本的問題は、言語研究の根本的かつ普遍的な問題についてであった。そしてそれを引き起こしたものは、術語の等価な翻訳という問題に他ならない。こうした翻訳の問題に関しては、*Cours* の訳者である小林英夫自身、次のように語っている。

“言語と思考との関係の問題は別として、わたしは訳出の仕事のうちに少なくとも国語的必然の問題と、表現的必然の問題と、さいごに翻訳術そのものの問題との三つをかぞえるのである。およそ翻訳をなそうと思えば、この三つの問題にはいやでもぶつからざるをえない。そうしてそのいずれにも言語学者の注意をよぶ権利があるであろう。[中 略] かれは原文におけるAの表現がなにゆえに、かれ自身の国語に移すさいには、それに対応する表現aをもってせずbをもってせざるをえなかつたかを知っている。かれは原文におけるAの表現がなにゆえにそれに対応するaをもって移しうるにもかからわずbをもって移したかを知っている。そうした自覚を多くもつときは、およそAのごとき表現に遭遇したばあいには、いかにしてそれを自国語に移植すべきかを悟るようになる。(1977:409-410)”

小林のこの言葉は、極めて示唆的である。この言葉を小林自身の*Cours* 翻訳に当てはめて考える時、“langue”に「言語」という訳語を当てた真意がどこにあるかは、今となっては知る由がない。また、翻訳にまつわる普遍的問題については、すでに*Cours*において、次のようにその原点的示

唆が提示されている。

“Si les mots étaient chargés de représenter des concepts donnés d’avance, ils auraient chacun, d’une langue à l’autre, des correspondants exacts pour le sens; or il n’en est pas ainsi.” (1916:161)

“もし語というものが、あらかじめ与えられた概念を表出する役目を受け持ったものであるならば、それらはいずれも意味上精密に対応するものを、言語ごとにもつはずである;ところが事実はそうではない。” (1972:163)

この記述を見ると、“時枝・服部論争”で論争の題材となり、またその論争の発端となった術語の翻訳とその解釈にまつわる全ての問題は *Cours* におけるソシュールの学説の記述から始まり、またその解決に通じる示唆も *Cours* においてすでに提示されていたことに気付かされる。このことは、“時枝・服部論争”の出発点と帰結点が、全て *Cours* に回帰するものであることを意味している。現代における言語研究は、*Cours* によりその出発点を見、*Cours* に回帰するものであることを見る時、ソシュールの学説と *Cours* が現代言語学の礎として扱われる理由もそこに見出されるのである。

## 6. むすび

“時枝・服部論争”は、時枝が小林による翻訳を介してその学説を読み誤ったことに端を発する、極めて特殊かつ複雑な性質を兼ね備えた問題であったとされる。仮に、時枝がフランス語に通じ、時代的な背景が時枝に原典の *Cours* を読むことを許したとしたら、あるいはまた、丸山圭三郎や大橋保夫らによるソシュール学説における術語の正しい解釈とその真意についての解説が、もう十年早く行われていたならば、果たしてこうした議論自体が存在したかどうか疑わしい。そのためこの議論が日本独特の特殊なものであるとする否定的な見方も存在する。丸山圭三郎自身、この一連の論争の特異性について、かつて次のように述べている。

“ところで面白いことに、ソシユールに対する誤解ないし批判は、我国における現象と、アメリカのそれと、そしてヨーロッパにおけるものが、それぞれ三者三様、独特のニュアンスを呈している。日本においては、何よりもまず翻訳自体の問題を無視するわけにはいかない。我国の特殊事情は、『講義』自身というよりは、その翻訳をもとに論争が行われた点にあり、日本においてはソシユール現象そのものが二重だと言うのも、そのような意味からである。(1980:85)”

しかし、私個人の見解として述べれば、“時枝・服部論争”における一連の論争が学問的に不毛なものであったとは思えない。そこでは常に「言語とは何か」という、今日性を持った先進的かつ普遍的な言語学の問題を提示した極めて有意義な議論が展開されていた。それは同時に、言語研究に従事する者に対して、言語の問題がどこにあり、その研究に臨む姿勢を示してくれるものであった。そしてそれは、言語の研究者が、最終的には常に同様の問題に突き当たることを如実に示していた。

こうした現象は、言語研究の歴史を通じて、そこで言語学者が少なからず似通った視点や発言を繰り返している事実にも見る事が出来る。例えば、服部四郎の“文の意義は、それに含まれる単語の意義素の単なる総計ではなく、それ以上のものである(1979:55)”という記述や丸山圭三郎の“出發すべきは常に全体からであり、全体は個の算術的総和ではない(1981:95)”という指摘は「全体は部分の総和以上のものである」というゲシュタルト心理学の中心的主張に通ずる。同様に時枝が、“言語は思想内容を音声或は文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとするものである(1941:7)”と言う時、それが“Sie selbst ist kein Werk (*Ergon*), sondern eine Thätigkeit (*Energie*). (1836:LV-LVII) [言語そのものは出来上がった作品(エルゴン)ではなくて、活動性(エネ<sup>グ</sup>ル<sup>エ</sup>ル<sup>ク</sup>ゲイア)である(1984:70)]”と言うフンボルトの主張と類似点を見出すことに、何ら驚きを感じない。同時に、時枝の“言語は、その本質にお

いて、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間の事実の中において、人間の事実との関連において、これを観察するということである（1956:6）”という主張がイエスペルセンの“The essence of language is human activity（1924:2）[言語の本質は人間の活動である（1958:1）]”という主張と共通するものであることも、何ら不自然に映るものではない<sup>8)</sup>。

また、このことについては、加賀野井秀一（2007:27-28）も次のようにしめくくる。

“[前 略] ソシュールが、ラングを重視していたことに変わりはない。

ただし、批判者たちが言うように、彼はランゲージュやパロールの研究を切り捨てたわけでも、断念したわけでもなかった。とりあえず手堅い対象であるラングから出発すべきだというだけのことで、やがてパロールをもランゲージュをも考察しようとしていたふしはある。結局、ソシュールの研究が、生涯にわたりラングに終始してしまったのは、ラングの謎が予想以上に大きかったこと、そしてまた、彼の生涯があまりにも短かったことによるのだろう。”

言語を研究対象とする者は、そのアプローチの仕方に違いこそあれ、最終的には同じ問題点に遭遇する。そして服部や時枝のこれらの言葉は、構造主義や認知主義といった学問上の枠組みを超えて、言語研究のあり方を、すでに人間主体の認知構造の中で捉えようとする先見的な視点を持っていたことを如実に物語っている。その点で、細かい術語やその解釈の上での食い違いはあったとしても、時枝、服部の双方が、最終的には同じ視点で言語の研究に当たっており、同じ視点であるが故に、そのアプローチの仕方において互いに反駁しあう議論が成立したと考える方が自然である。

またその研究の性質も、部分的に重なる点を払拭し得ないのも事実である。このことについて、井島正博（2007:52-53）は、次のように指摘する。

“時枝は『国語学原論』の中で、ソシュールを「言語構成観」に立つ研究者として批判し、自らの「言語過程観」を称揚する。しかし、ソシュール

には、先に見たように、文法に関わるような発言はほとんど見られない。時枝の言語過程説は必ずしも文法に限られた理論ではないとしても、そこで批判されているソシュールは、実像とは大きくかけ離れていることは否めない。[中 略]

ここで、先ほど、言語学の展開を論ずる中で、ソシュールの理論に忠実に最小単位を理論の中心に据えた音韻論、形態論から、統語論へ進むためには、最小単位ではなく規則を理論の中心に据えるという認識の変革が必要であったと述べたことが思い合わされるかもしれない。それならやはりソシュールも「言語構成観」に立っていたと言ってよいのではないかと、反論を受けそうである。しかし繰り返すが、ソシュールは文法についてほとんど議論していない。[中 略]

実は、洋の東西を問わず、伝統的な文法論と言えば、文の構成単位を論ずる広義の「品詞論」であった。そもそも、文を構成する規則を規定することが文法論であるという認識が成立する以前に、文の構成単位を論ずるより他にどのような文法論があり得ただろうか。[中 略]

このように、ソシュールを引き合いに出すまでもなく、文法論における品詞論はむしろ主流派であったと言える。時枝自身も『国語学原論』の総論において「言語構成観」を痛烈に批判しているものの、各論になると伝統的な品詞論とあまり変わらない文法論を展開している。”

科学としての言語学が最終的に目指すものは、言語の説明理論である。近代言語学の最初の百年は、歴史的な存在としての言語がその中心的問題とされ、次の五十年では生物学的必然としての言語習得及び言語運用に焦点が当てられた。そこでは、人間の有する言語の知識がどのようなものであり、それがどのように獲得され、使用されるかを文法という名を借りて、客観的に模式化する必要があった。従って、言語知識や言語獲得の問題と、言語の使用やそれを基にしたコミュニケーションの問題とその解明は、言語学における最初にして最後の究極的課題である。ソシュールの学説も時枝の学説も、その解明に腐心していた点では共通点を持つ。

こうした認識が更に発展、成熟し、言語と認知という視点から言語現象の解明を目指したものが、80年代から台頭してきた、いわゆる「認知言語学 (Cognitive Linguistics)」と呼ばれる言語学である。認知言語学は、言

語が人間の認知機構と深い関わりを持つという立場を取る性質上、特に心理学的な概念をその基本に置き、とりわけ知覚心理学や認知心理学との関わりが深い。認知言語学の特徴は、言語と認知に関する哲学、心理学等の関連分野の研究成果を取り込み、人間の現実の活動における広範で多様な言語現象に対する理論体系を構築しようとする点にある<sup>9)</sup>。

個々の点において、ソシュールの学説における諸現象が名前を変えつつも、その今日の認知言語学の性質の根幹において累を及ぼしていることは枚挙にいとまがなく、このことは野村益寛（2007:34-36）の指摘にも見ることができる。

野村は、認知言語学における「記号的文法観（symbolic view of grammar）」、「用法基盤モデル（usage-based model）」という考え方を引き合いに出し、その性質と姿勢の源泉をソシュール学説に求める。

“認知言語学は言語の恣意性＝無基盤性というソシュールの考え方を斥け、世界の分節は恣意的ではなく、人間の認知の傾向性と斑をもつ環境との相互作用によって制約されるとする立場をとる。[中 略]

その一方で、ラネカーの認知文法（Langacker 1987, 1991）に代表される認知言語学は、チョムスキーによって過去の遺物にされてしまった感のあるソシュール学説の諸相を再評価し、現代に甦らせているとみることができる。[中 略]

ソシュールにとっての「意義的」とラネカーの「有意味的」とは両者の意味観の相違を反映してその性質が異なるとはいえ、＜意味＞ということ語彙と同様に文法についても問うことができるとする姿勢は共通する。そして語彙と文法に同じ原理が妥当するのであれば、語彙、形態論、統語論の区別は度合いの問題であり、連続的なものと考えてる点においてもソシュールとラネカーは共通する。”

認知言語学のこうした基本姿勢を見ると、時枝の“言語過程説は、言語において、人間を取り戻そうとするのである。言語は、その本質において、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間的現実の中において、人間的現実との関連におい



て、これを観察するということである(1956:6)”という言葉が、なおさら鮮明に、今日的な意義と深みを持って思い起こされるのである。

そしてそこに、我々は今日の言語研究の成熟を支える源流を見るのである。

(追記) 本論文は、敬愛大学2008年度プロジェクト研究費(研究課題「時枝・服部論争の言語学的意義についての現代的考察」)の助成を得た研究成果である。

引用文中の旧字体は、全て新字体に改めた。また、Saussureの日本語表記も時代によって、“ソッスユール”、“ソッシュユール”、“ソスユール”、“ソシユール”と異なるが、本稿では全て“ソシユール”で統一した。更に、引用文中で“右は”となっているのは、原典では原文が縦書きであるためである。

また、現在では使用禁止とされている卑語や侮蔑語は、当時の原資料を重んじる意味でも、あえてそのまま用いた点、ここに改めて記しておく。

更に、2007年は奇しくもソシユール生誕150周年ということで、様々な記念シンポジウムや研究会が催されたが、その縁あって国広哲弥先生からご紹介頂いた、東北大学大学院文学研究科の阿部 宏先生、またフランス語談話会での阿部 宏先生を通じて、名古屋大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」における「ソシユールとテキストの科学」所載の釘貫論文や松澤論文を個人的に紹介して下さった。ここに記して心より深謝申し上げたい。なお言うまでもなく、本論における不備の一切は、全て松中個人の責による。

## 注

- 1) 吉本への批判には、その論の直接的な内容についてはもとより、その文章の難解さといった余剰的な部分にまで批判が及んでいる。例えば丸山静は「日本読書新聞」誌上の「今週の一冊」欄において、吉本の『言語にとって美とはなにか』を取り上げ、そこでの吉本の考察の仕方について次のように苦言を呈する。

“数年前、吉本隆明が「試行」にたてこもって、この『言語にとって美とはなにか』を書きだしたことは、たしかに、壮挙というに適わしい出来事であった。[中 略]ところで、私などがわずかにかいまみることができただけだからといっても、この本における吉本の言語そのものについての考察は、あまりにも貧しく、ひとりよがりのである。(1965<sup>a</sup>:9)”

と述べる。同じく丸山は、「言語についての考察」においては、

“かれがまったく新しい世界をたずさえて言葉の表現に参加したとしても、ひとりで言葉の歴史の現在にたっているだけだし、また、どんな密室のなかで言葉を練ったとしても、現実社会の息づかいのなかに流動している。だから欲しないにもかかわらず別の意味をはらんでしまうという言葉の性格は、かならずしも全部が個人によって左右できる自由ではない。(1965<sup>b</sup>:86)”

と、間接的に吉本の言葉遣いについて論ず。また田中美知太郎は、吉本の『言語にとって美とはなにか』を直接の題材とはしないまでも、その文体について読売新聞夕刊の社会面、「論壇時評」において、次のように遠回しに批判する。

“今月の雑誌では、まず「展望」の「戦後思想の荒廃」（吉本隆明）を興味深く読んだ。もっともその文体は、わたしには親しみのないものなので、充分には理解できないところもあり、ある範囲の仲間だけにしか通じないのではないかと思われる暗黙の了解みたいなのが、わたしには欠けているような気がするので、わたしの興味といっても部分的な理解にもとづくものなので、論者にはかえって迷惑なのかも知れない。(1965:9)”

一方大久保忠利は、『言語にとって美とはなにか』を解説する」で、

“ことに、吉本の論の欠点は基礎的な概念の無規定とにあることがわかりかけた。論の最も重要な概念である「自己表出」と「指示表出」の二区分についても、極めてわかりにくい。[中 略]べつに、中学生・高校生にもわかりやすくとか、大学の

学部の学生にわかるようにと、要求しているわけではない。しかし、この「わかりにくさ」は度を越している。彼の論のわかりにくさについては、田中美知太郎・丸山静氏なども指摘している。おそらく天下周知の事実なのであろう。(1966<sup>a</sup>:149)

と辛辣に批判する。また同じく大久保は、「吉本隆明の言語本質観は特異なものであるか」においては、

“吉本の文章を読むことは、じつに「解説」の名に値する難解なものの読みとりであった。ずいぶん長い時間をかけて解説した結果、大の心に浮かんだ川柳は、  
化けものの正体見たり枯れ尾花  
であったことを、先に紹介しておく。(1966<sup>b</sup>:8-9)”

と告白する。更に時枝誠記は、本文中でも前述したように、

“実のところ、私は、吉本氏の著書を読むのに少なからず苦勞した。今でも、的確には、そのイメージが頭に浮かんで来ないような気がする。それが何に由来するのかを考えてみたのであるが、氏の論述には、他説の引用が非常に多い。(1966:7)”

と困惑を隠そうとはしない。

- 2) 丸山が本格的に、*Cours*における“*langue*”概念の正確な解釈研究の成果として発表したのは、この1971<sup>a</sup>であるが、実は丸山はこれより一年前に、すでにこの時の青写真となる指摘をしている。それが1971<sup>b</sup>の論文である。丸山はそこで、あくまで構造主義と言語学の関係に重点を起しながらも、構造主義の原点であるソシュール学説にも言及している。その中で、丸山は“*langue*”概念について、“*langue*は*forme*であり、*parole*は*substance*、そうして、*langage*は*forme*を与える力、*forme*を生み出す能力なのである。(1971<sup>b</sup>:36)”と述べており、後の丸山の“*langue*”概念の解説は、ほとんどその全てが、この時のものを下敷きとしている。
- 3) 我が国では、翻訳理論や翻訳に伴う諸問題は、古くから文学論の片隅に位置付けられてきた。それは、森鷗外や二葉亭四迷の翻訳でも知られるように、我が国における翻訳は常に西洋諸国の文学作品の翻訳という形でしか受容されて来なかったためである。そしてそれ故に、我が国では翻訳のあり方をめぐって、論争が繰り返されてきた歴史がある。例えば、森田思軒『翻訳の心得』(1887)に始まり、二葉亭四迷『余が翻訳における基準』(1906)、森鷗外『翻訳に就いて』(1914)、野上豊一郎『翻訳論』(1932)、森田草平『翻訳の理論と実際』(1933)、伊藤 整『翻訳の研究』(1933)、沢村寅二郎『訳読

と翻訳』（1935）、神西清『翻訳の生理と心理』（1938）、新居 格『翻訳論』（1941）、柳田 泉『翻訳文学論 明治時代』（1943）、中野好夫『翻訳文学論 大正・昭和時代』（1943）、吉川幸次郎・大山定一『洛中書簡』（1946）、福田恒存『翻訳論』（1966）に見られる翻訳の理想や問題は、西洋文学の翻訳のあり方について論じたものである。その中でも特に、吉川幸次郎と大山定一の『洛中書簡』における直訳、意識論争は、そうした翻訳論争の代表的なものとして今日でも殊に有名である。そこでの両者の主張は、簡単にまとめると、吉川が直訳賛成を唱える立場に立ち、大山が意識賛成の立場に立つものである。双方の意見はどちらもが一理あり、また今日まで解決され得ない翻訳の普遍的な問題として注目に値する。二人の主張を簡略化すると以下のようになる

（↑ ↓ はそれぞれの論に対する反対意見を表わす）[吉川・大山論争の経緯の簡略化については、東京大学の井上 健教授の示唆を参考にさせて頂いた]。

吉川（直訳派）

- (1) 翻訳はあくまで翻訳という独自の作業であって、対象となる外国の文学作品とは何の深い関係をも持ち得ない。
- (2) 翻訳とは外国の作品の内容をつつがなく分からしめるためのものであり、その点で一種の方便であり童蒙に示すためのものにすぎない。
- (3) こうした観点から翻訳とは、変に訳者の思い込みや主観をちりばめられるよりも、原文の持つだけの観念を過不足なく伝えてくれた方が分かり易くて便利である。



大山（意識派）

- ・ (1) の考えについては同感出来るが、(2)、(3) の考えについては同感しかねる。
- ・ そもそも「翻訳文学」とは単純に外国の作品の言葉を置き換えたものという意味ではなく、それ自体がすでに立派な一つの文学であるという意味である。
- ・ それが翻訳とは表面的な言葉の置き換えのみで成立するという考えのため、昨今では、そうした作品の生命までも理解した「翻訳文学」が少なくなり、安易な翻訳が増えてしまった。



吉川（直訳派）

- ・ 翻訳には様々な形があつて然るべき。
- ・ 学問としての翻訳は“広く原語がその言語の世界の中で象徴せんとするだけのものを、同じ比率で受容言語たる国語の世界で象徴し得る国語”であるべきであり、その要求をほぼ完全に満たす国語は必ず存在する。

- ・翻訳とは、“二つの民族の異なる言語という矛盾した存在の中に、統一した方向を見出そうとする努力”である。
- ・そうした中であっては、原語の情報をよりの確に呈示することが望まれ、原文における単語相互間の力学をより忠実に再現すべきである。その結果が逐語訳である。



大山（意訳派）

- ・詩の翻訳は“詩”でなければならず、小説の翻訳は“小説”でなければならない。
- ・翻訳者は、訳語の一つ一つが、日本語を豊かに美しくするものであるかどうかを判断しなければならない義務を負う。
- ・現在の西洋文学の翻訳のあり方を、鷗外、四迷にまで帰し再出発させたい。

この論争の根底にある問題は、翻訳における普遍の問題として、先の山内、グロータースの指摘にも通じる原典的なものである。

- 4) ソシュールの考えによれば、主体の言語意識には純粹的な観念というものは存在しない。Culler (1976:112) が指摘する様に、

“First, it may now be clearer why Saussure should have insisted on the psychological reality of la langue, which he treats as a social product that the individual passively assimilates. [中 略] what one 'has in mind' while speaking or writing is not a form and meaning conjured up for a fleeting instant but the whole system of a language, more permanently inscribed.

It is thus possible to emphasize, as Saussure himself often did, that meaning or the signified is not an entity so much as a bundle of differential values, a space in a system of differences. (第一に、なぜソシュールがラングの心理学的実存性を力説したかが、今やいっそう明らかであろう。ソシュールはラングを、個人が受動的に同化する社会的産物として扱っている。[中 略] すなわち、話しあるいは書いている間に人が「心中にもっている」ものは、擦過する一瞬のあいだ喚び起される形式と意味ではなくて、もっと永続的に刻みこまれた言語の全体系である。

意味もしくは意味内容は存在体であるよりはむしろ差異の価値の束であること、差異の体系のうちの空間であることを、ソシュールが行ったように強調することが、こうして可能になる。(川本茂雄1978:166)”

という認識こそ、ソシュールの出発点である。そしてそうした差異の価値の束は、体系内において差異を繰り返す主体の活動と、歴史的、社会的にそれを沈澱させる恣意性の原理によって決定される。こうした視点は、時枝の説

く社会（あるいは場面）の中における主体の過程活動における言語の在り方と同一であると考えられる。

- 5) ただし、このことは時枝がフランス語と *Cours* の原典に通じていないということの意味しない。むしろ時枝はフランス語と *Cours* の原典には通じていたものの、より一般向けに小林訳を足場にした節がある。時枝自身は英語の代わりにフランス語が教えられていた暁星中学の出身であり、暁星中学時代からフランス語には堪能であったと思われる。また東大教授時代には、「国語学概説」、「国語学概論」の講義において、*Cours* の要点をフランス語で黒板に書き出し、それに基づいて講義を行っていたということを、その講義に出席していた（昭和27年頃）国広哲弥氏から私が個人的に頂いた情報でもある。こうした事実を鑑みると、これまで多くの時枝反対派が述べてきたような、時枝が原著である *Cours* を解さず、小林による翻訳を介して *Cours* の学説を読み誤ったといった主張は、決して的を射たものではないと思われる。
- 6) ここでの磯谷と同様の指摘は、大橋保夫（1973<sup>b</sup>:17-18）や丸山圭三郎（1983:112-113）においても見られる。
- 7) リードランジェ、ゴルティエ、コンスタンタンらの講義ノートは今回直接手に入れることが出来なかったが、そこで記されている内容については丸山（1981、1983、1985）やガデの書（1981）で垣間見ることが出来る。丸山（1981）は、リードランジェらのノートの記述をまとめて、次の様にラングの正しい解釈を施している。

“ラングはすぐれて社会的なものである。いかなる事象も、その出発点はどうあれ、それが万人の物となるまでは言語的には存在しない。[中 略] ラングを記号学的制度の中に位置させねばならない。ラングはこの科学の主要な部門を占めることになろう。何故ならラングはその一般的モデルとなるであろうから。（1981:267-268）”

一方ガデは、ソシユール自身が唱えたソシユール学説の本来の姿勢を次のように指摘する。

“La premièr matière à quoi se confronte le linguiste en abordant son travail est de l'ordre de la parole. L'accès à la langue est une sorte de ((filet)) serré et abstrait, qui donne forme à la substance que constitue la parole. La parole est donc la voie d'accès obligée à la langue. [中 略] Le fait que ce soit par la parole que le linguiste accède à la langue justifie l'ordre de présentation adopté par Saussure dans son troisième cours, tout à fait différent de celui qui est suivi par le *CLG*. [中

略] La langue est un savoir linguistique qui se manifeste avant tout par des jugements d'identité et de différence.

L'ordre de présentation du *CLG*, faisant intervenir langue/parole dès le début de l'exposé, est donc paradoxal. La signification de ce couple conceptuel apparaît de façon plus nette dès que l'on restitue l'ordre conçu par Saussure dans son troisième cours: d'abord une interrogation sur les identités diachronique et synchronique, puis le caractère arbitraire du signe qui permet, à travers la valeur, de parvenir à la langue comme forme, et seulement alors l'opposition langue/parole. (1987:79-80)”

“自分の仕事に取り組んでいるときに、言語学者が立ち向かう第一の<sup>マチュール</sup>質料は、パロールの次元に属している。ラングへのアクセスは、直接的観察には属していない。なぜなら、ラングとは、一種の目の細かい抽象的な「網」であり、パロールが構成する<sup>シニアスタンス</sup>実質に<sup>フォーミュラ</sup>形式を与えるものだからだ。だから、パロールは、ラングにアクセスするのに避けられない道なのだ。[中略] 言語学者がラングにアクセスするのはパロールをつうじてだという事実は、第三回講義でソシュールが採用した提示の仕方の順序を正当化するものだが、これは『講義』がたどる順序とはまったく異なっている。[中略] ラングとは、なによりもまず同一性判断と差異判断によって顕現する言語(学)的知にほかならない。

ラング／パロールを論述の最初から紹介させる『講義』の提示の仕方の順序は、したがって逆説的なものだ。この概念的対の意味は、ソシュールが第三回講義で構想した順序を復元すれば、ただちにいっそうはっきりと浮かびあがってくる。すなわち、最初に、通時的同一性と共時的同一性にかんする問いかけ、つぎに、記号の恣意的性格、これが価値を介して、<sup>フォーミュラ</sup>形式としてのラングへの到達を可能にし、そのとき初めてラング／パロールの対立が現われるのだ。(1995:122-125)”

この記述を見ると、ソシュールがパロールの検討から出発して、そこからラングとパロールの対立の図式が現われたことになる。そうすると、ラングとパロールの対立から始まる *Cours* の記述そのものが、ソシュール本来の考えとは矛盾し、逆であることが分かる。しかも、言語学の研究対象としてラングの優位性を説く部分が、ソシュール自身の手によるものではなく、全て編者であるセシエとバイイによるものであることが明らかになった現在、果たして時枝とソシュールの言語研究の姿勢に決定的な違いがあるのかさえ疑わしくなって来る。こうした現実を目にする時、ソシュールの研究姿勢と時枝の研究姿勢は、同一のものであると考える方が妥当である。時枝学説とソシュール学説の出発点の類似点に対して、前田英樹(1978:54-55)は次の様にまとめている。

“時枝が言う「過程」とソシュールの「現象」の間には、結局どんな相違があるの

か。素材－概念－聴覚映像へと至る「過程」において、主体が果たす役割は、時枝にとっては「個物」の概念的な「変形作用」にある。[中 略] ソシュールにとっては、言語の外にこのような「個物」としての素材は存在しない。主体が言語に先立って持っているものは、あえて言うなら世界についての直接的な経験の連続体であり、彼はそれを混沌とした「思考」と呼ぶわけである。「過程」の本質が、素材－概念－聴覚映像といった段階をめぐる変形作用にあるとすれば、「現象」の本質は、主体の混沌とした「思考」もしくは経験の連続体のなかに差異を生じさせることにある。[中 略]「過程」と「現象」の間には、言語経験に関する最も根源的な見解の相違があった。前者のなかには、言語主体による意識的で能動的な「加工変形」の活動があり、後者のなかには、語る主体が自己の内部に生じさせる差異そのものがある。たしかに時枝とソシュールは、いかなる分析によっても対象化されることのない言語とは何かを知ろうとし、共にその本質を語る主体の意識活動のなかに送り返そうとした。しかし、ただソシュールのみがさらに、いかなる方法、いかなる意識によっても対象化されることのない言語とは何かを知ろうとし、その本質を究極的な差異の観念に送り返そうとしたのである。”

更に、前回の「時枝・服部論争の再考察(Ⅱ)」における注1でも指摘したように、時枝のソシュール学説批判は、直接ソシュール自身の考えというよりも、橋本進吉の『国語学研究法』を引き合いに出し、その研究姿勢がソシュールの学説を踏襲したものである点を指摘しながら、当時の言語学界の研究姿勢を批判していたと思われる節が強い。

このことについては同様に、井島正博(2007:52)も次のように述べている。

“時枝の言語過程説は必ずしも文法に限られた理論ではないとしても、そこで批判されているソシュールは、実像とは大きくかけ離れていることは否めない。むしろここでは、時枝以前の文法理論、もっと特定すれば時枝の前任者の橋本進吉の文法理論が、ソシュールの名を借りて批判されていると考える方が納得しやすい。”

#### 8) 時枝は己の学説の基本姿勢を、次のように説く。

“言語を表現過程の一形式であるとする言語本質観の理論を、ここに言語過程説と名付けるならば、言語過程説は、言語を以て音声と意味との結合であるとする構成主義的言語観或は言語を主体を離れた客体的存在とする言語実体観に対立するものであって、言語は思想内容を音声或は文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとするものである。(1940:7)”

時枝のこうした言語研究に対する姿勢は、服部も指摘するように(1957<sup>a</sup>:3)、時枝独自のものではなく、約一世紀以上前の言語研究の黎明期にあって、す



でW.フンボルト (Wilhelm Humboldt 1767 – 1835) の以下の言葉にも通じるものがある。

“Man muß die Sprache nicht sowohl wie ein todttes Erzeugtes, sondern weit mehr wie eine Erzeugung ansehen, mehr von demjenigen abstrahiren, was sie als Bezeichnung der Gegenstände und Vermittelung des Verständnisses wirkt, und dagegen sorgfältiger auf ihren mit der inneren Geistesthätigkeit eng verwebten Ursprung und ihren gegenseitigen Einfluß darauf zurückgehen. [中略] Sie selbst ist kein Werk (*Ergon*), sondern eine Thätigkeit (*Energiea*). Ihre wahre Definition kann daher nur eine genetische sein. Sie ist nämlich die sich ewig wiederholende Arbeit des Geistes, den articulirten Laut zum Ausdruck des Gedanken fähig zu machen.” (1836:LV-LVII)

“すなわち、我々は、言語をと見做してはならないのであって、むしろ、と考へなくてはならないのである。更に我々は、いろいろな対象にその呼び名を与えるとか、理解を助けるための手段になるとかいった役割から一応言語を引き離してみた上で、今度は一層細心な注意を払いながら、内面の精神活動と密接に結びついている言語の根源へと立ち戻り、言語と精神とが相互に与え合っている影響がどんなものであるか、という問題まで掘り下げてゆかなくてはならない。[中略] 言語そのものは、出来上がった作品 (エルゴン) ではなくて、活動性 (エネルゲイア) である。それ故、言語の本当の定義は、生成に即した定義しかあり得ないことになる。すなわち、言語とは、分節音声を思考の表現たり得るものとするための、永劫に反復される精神の働きなのである。(1984:70-73)”

あるいはまた、O. イェスペルセン (Otto Jespersen 1860 – 1943) の次の言葉にも通じるものがあろう。

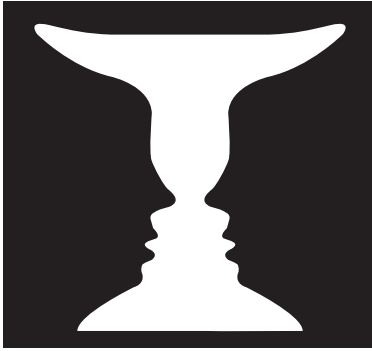
“The essence of language is human activity --- activity on the part of one individual to make himself understood by another, and activity on the part of that other to understand what was in the mind of the first. These two individuals, the producer and the recipient of language, or as we may more conveniently call them, the speaker and the hearer, and their relations to one another, should never be lost sight of if we want to understand the nature of language and of that part of language which is dealt with in grammar. But in former times this was often overlooked, and words and forms were often treated as if they were things or natural objects with an existence of their own --- a conception which may have been to a great extent fostered through a too exclusive preoccupation with written or printed words, but which is fundamentally false, as will easily be seen with a little reflexion. (1924:2)”

“言語の本質は人間の活動である。その活動は、自分の思うところを相手に理解させるためのものであり、また逆に見れば相手の思うところを理解するためのものである。この二者、つまり言語の供与者と受容者、便宜上もっと平たくいえば、話し手と聞き手、および二者相互の関係は、言語の本質とか文法で取扱われる言語の面とかを理解しようとする場合、決して見失ってはならないものである。ところが以前にはこのことが往々にして看過され、語や形式があたかも「物」あるいはそれ自身の存在をもった自然物であるかのような取扱いを受けたことがよくあった。これは、大部分、書かれた（または印刷された）語に一途にとらわれたために育てあげられた観念であるが、それが根本的にまちがっていることは少し考えれば容易にわかることである。(1958:1)”

こうした視点の一致は、言語研究において、その根本的姿勢が普遍的に共通するものであることを物語るものではあるまいか。

- 9) 認知言語学は、ゲシュタルト心理学における中心的主張である、「全体は部分の総和以上のものである」という考えを基盤に置く。これは換言すれば、①全体的構造の方が、部分的構造よりも知覚されやすい、②部分は全体を踏まえて概念化される、ということに他ならない。これは、例えば、テレビの画面に映し出される映像や、新聞紙上の人物写真等を思い浮かべれば、ここで述べている主眼点が推測され得よう。つまり、テレビ画面の映像や新聞の人物写真は、細かくその細部にまで視点を移すと、それを構成している一つ一つの要因は赤、青、緑の光の粒子の集まりであったり、インクの黒い点の集まりである。しかし、我々は通常、こうした一つ一つの構成要素を気に止めることもなく、それが映し出す全体としての映像、あるいは人物写真といった構造を認識している。つまり、人間の認識は、部分を知覚している場合であっても、常にその全体を前提としているものであり、各部分、各構成要素はその全体の構成の中にどのように位置付けられるかによって規定されるのである。そして認知言語学における考え方の基礎を成すものに、ゲシュタルト要因の成果として挙げられる、我々の知覚における「FigureとGroundの分化 (Figure-Ground Segregation)」という現象がある。これは、我々が物や出来事を視覚によって解釈する場合、客観的には同一現象と捉えられることでも、その視点の採り方によって異なった解釈を生み出す場合があるという現象を表わしている。この典型的な例が次の図1の、視点による絵の変化をもたらす「Figure-Groundの反転図」である。これは、我々の視覚の中に二種類の異質な領域が同時に存在する場合、いずれか一方が強く浮き上がり、もう一方はその周囲となる空間のように沈み込んでしまう現象を提示している。ゲシュタルト心理学の術語を用いれば、この強く浮かび上がる方を“Figure (図)」、周囲の空間となって沈み込む方を“Ground (地)”と

図1 ルビンの盃



して区別する。図1で見ると、見方によって白い盃の方が強く見えたり、黒い二人の横顔の方が強く見えたりする。これは、客観的な外部世界の対象としては同じ図形であっても、どの部分を図とし、どの部分を地とするかによって捉え方が異なってくることを示唆している。例えば図1においては盃と横顔が同時に両方共見えることはなく、常にどちらか片方しか図として認識され得ない。この例が示していることは、知覚には解釈が関

わってくるということであり、どちらに注目するかという知覚者の主体的な働きかけにより、同じ図形の解釈が変わり得るということである。そしてこの「Figure - Groundの反転図」の認識こそは、その具体的現象である。

ある環境において、どちらが図となり、地となるかは主体的条件によっても、刺激布置の条件によっても規定され得る。現実生活における知覚では、その時々欲求や生活の向き、態度、過去の経験等によって、どちらを図として認識されやすくなるかが異なってくる。

そして注目すべきは、時枝自身が、「詞と辞の連続・非連続の問題」(1954)において、すでにこの図を用いて自らの言語過程説を説明付けている点である。時枝はそこで、この図を基に、自らの言語過程説における、特に詞・辞の区別の揺れを次のように説明付けている。

“要するに、語は、個々の表現を基にして、それぞれ、別個にその語性が判定されなければならないということになるのである。このように考えて来ると、例えば、「あり」は、その表現においては、必ず、詞の場合であるか、或は辞の場合であって、同一表現において、詞であると同時に辞であるというようなことはあり得ないのである。[中 略] この理論を立証するために、心理学で用いられるルビンの視知覚の図形 E.Rubin: Visuell wahrgenommene Figure を借用しようと思う。私は、ここでは、この図形が心理学で使用される本来の意味とは、別の意味で使用することになるかも知れないのである。この図形の中心を凝視していると、盃の部分が、図形として前面に張出し、二つの顔は、背景になっているように知覚される。次の瞬間に、今度は、二つの顔が、図形として前面に張出し、盃がその背景になる。このような交替が繰返される。ここで知り得ることは、(一)初めの図から次の図への交替は、突如として行われるので、図形より背景への転換には連続性はない。(二)一つが図形

として知覚される時は、他の図形は全く意味を失う。二つの図形が、同時に成立することはない。(三) 盃が図形になる時と、顔が図形になる時とは、それぞれ別個の図として扱われなければならない。以上、三つの事柄であるが、ここで重要なのは(三)である。この図は、同書の解説によれば、多義図とも言われているそうであるが、それは、この図を凝視する者の立場を離れて、第三者的立場から言うことで、凝視者の立場から言えば、最初の図と、次の図とは、全然別個の図であって、両者の間には、何等の関係もない。交替の度毎に、新しい図が出来るわけであるが、最初の図と、第三の図とは同じものであるから、無数の図が出来ると言っても、類別すれば、二つの図が成立することになるのである。ここで、私の今の問題に関連させてみる事が出来るのである。一つの図形が、二つの意味を持っていると考えるのは、ソシュールの立場であり、一語に詞的なものと辞的なものとが共存すると考える立場である。凝視の態度によって出来る図形を、それぞれ別個の図形とするのは、図形は、凝視者を離れて本来あるものでなく、凝視者によって作り出されるとするもので、言語過程説における詞辞論の立場である。(1954:13-15)”

この知覚の分化という考え方は、認知言語学にも引き継がれる。認知言語学では、この知覚の分化という概念を人間の言語認識に当てはめ、言語の意味はその指示対象のみによって決定されるのではなく、認識者たる話者がその対象を如何に理解したかが意味決定の上で重要な役割を果すと考える。ここに見られる時枝の指摘は、部分的に認知言語学の原理に通ずるものであり、その先見性と共に言語現象の解明に対して、すでに半世紀近くも前に、人間の認知構造にその解決点を求めた着眼点に対して驚嘆の念を禁じ得ない。

## 引用・参考文献

- 相原奈津江 2007. 『ソシュールのパラドックス』 エディット・バルク.  
相原奈津江・秋津 伶訳/小松英輔編. 2007. 『一般言語学 第二回講義 リードランジェ/パトワによる講義記録 1908-1909』 エディット・バルク.  
相原奈津江・秋津 伶訳/西川長夫解題. 2007. 『一般言語学 第三回講義 コンスタンタンによる講義記録 1910-1911』 エディット・バルク.  
赤羽研三. 1998<sup>a</sup>. 『言葉と意味を考える [I] 隠喩とイメージ』 夏目書房.  
赤羽研三. 1998<sup>b</sup>. 『言葉と意味を考える [II] 詩とレトリック』 夏目書房.  
阿部 宏. 2007. 「ソシュールが言わなかった大きな二つのこと」 松澤和宏編. 2007. 『SAUSSURE et LA SCIENCE DES TEXTES ソシュールとテキストの科学』 pp.87-98. 名古屋大学大学院文学研究科.  
Banveniste, Emile. 1966<sup>a</sup>. Saussure apr ès un demi-si ècle, in *Problèmes de lin-*

- guistique Générale*. Gallimard. (三浦信孝訳. 1980. 「五十年後のソシュール」『現代思想 特集：ソシュール』第8巻、第12号、pp.124-139. 青土社.)
- Banveniste, Emile. 1966. *Problèmes de Linguistique G énérale*. Éditions Gallimard, Paris. (岸本通夫監訳. 1987. 『一般言語学の諸問題』みすず書房.)
- 別宮貞徳. 1983. 『スタンダード英語講座 [1] 英文の翻訳』大修館書店.
- Culler, Jonathan. 1976. *SAUSSURE*. Fontana, Collins. (川本茂雄訳. 1978. 『ソシュール』岩波現代選書.)
- Ducrot, Oswald. 1968. *Le Structuralisme en linguistique*. Seuil, Paris. (井村順一訳. 1978. 「言語学における構造主義」) (François Wahl 他. 1968. *Qu'est-ce que le structuralisme?* Éditions du Seuil, Paris. (渡辺一民他訳. 1978. 『構造主義 言語学・詩学・人類学・精神分析学・哲学』pp.9-88. 筑摩書房.))
- Engler, Rudolf. 1968. *Cours de linguistique g énérale, Edition critique*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Engler, Rudolf. 1973. *Rôle et place d'une sémantique dans une linguistique saussurienne*, in *Cahiers Ferdinand de Saussure*. No.28. (前田英樹訳. 1980. 「ソシュール言語学における意味論の役割と位置」『現代思想 特集：ソシュール』第8巻、第12号、pp.103-113. 青土社.)
- Fehr, Johannes. 2000. *Saussure entre linguistique et sémiologie*. PUF, Paris.
- Gadet, François. 1987. *Saussure, une science de la langue*. PUF, Paris. (立川健二訳. 1995. 『ソシュール言語学入門』新曜社.)
- Godel, Robert. 1957. *Les Sources manuscrites du Cours de Linguistique G énérale de F. de Saussure*. Genève, Droz, Paris, Minard.
- Godel, Robert. 1968. *F. de Saussure et les d ébuts de la linguistique moderne* in *Semaine d'études Genève67*. pp.115-124. (富盛仲夫訳. 1980. 「ソシュールと現代言語学の誕生」『現代思想 特集：ソシュール』第8巻、第12号、pp.114-123. 青土社.)
- Grootaers, W.A. 1972. 「書評 ソシュール著山内貴美夫訳『言語学序説』」『国語学』第88号、pp.8-12. 武蔵野書院.
- 蜂谷清人. 2002. 「近代日本文法学説史—大槻文法から時枝文法まで—」飛田良文・佐藤武義編. 2002. 『現代日本語講座 第五巻 文法』pp.146-178. 明治書院.
- 服部四郎. 1957<sup>a</sup>. 「言語過程説について」京都大学国文学会編『国語国文』第26巻、第1号、pp.1-18. 中央図書出版.
- 服部四郎. 1957<sup>b</sup>. 「ソシュールのlangueと言語過程説」日本言語学会編『言語研究』第32号、pp.1-42. 三省堂.
- 服部四郎他編. 1979. 『日本の言語学 第五巻 意味・語彙』大修館書店.
- 早田輝洋. 1969. 「言葉と物と意味」『言語生活』1969年11月号、No.298. pp.17-25. 筑摩書房.

- 樋口昌幸. 1974. 「ソシユールに関する覚え書き」『福岡大学人文論集』第6巻、第2・3号、pp.1085-1106. 福岡大学.
- 平田武靖. 1966. 「吉本隆明の反省—世代論を軸として—」『思想の科学』6月号、pp.73-94. 思想の科学社. (平田武靖. 1970. 『吉本隆明をどうとらえるか』pp.215-245. 芳賀書店. にも再録)
- Hjelmslev, Louis. (小林英夫訳. 1958. 『一般文法の原理』三省堂.)
- Hjelmslev, Louis. (竹内孝次訳. 1985. 『言語理論の確立をめぐって』岩波書店.)
- 堀井令以知. 1972. 「記号学と言語学」『愛知大学文学部論叢』第47号、pp.51-75. 愛知大学文学部.
- 藤井貞和. 1966. 「『表現としての言語』論の形式」三田文学会編『三田文学』8月号、pp.56-66. 慶応義塾大学三田文学編集部.
- Humboldt, Wilhelm. 1836. *ÜBER DIE VERSCHIEDENHEIT DES MENSCHLICHEN SPRACHBAUES UND IHREN EINFLUSS AUF DIE GEISTIGE ENTWICKELUNG DES MENSCHENGESCHLECHTS*. Berlin. (亀山健吉訳. 1984. 『言語と精神』法政大学出版局.)
- 井島正博. 2007. 「日本語文法から見たソシユール」『月刊 言語』2007年5月号、pp.48-55. 大修館書店.
- 磯谷 孝. 1975. 「言語体系論から言語コミュニケーション論へ」『現代思想』6月号、pp.224-243. 青土社.
- 磯谷 孝. 『翻訳と文化の記号論』勁草書房. 1980.
- 泉 邦寿. 1972. 「ソシユールの言語記号と若干の問題」『上智大学外国語学部紀要』第7号、pp.1-21. 上智大学外国語学部.
- Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin, London. (半田一郎訳. 1958. 『文法の原理』岩波書店.)
- 加賀野井秀一. 2007. 「入門のソシユール」『月刊 言語』2007年5月号、pp.24-31. 大修館書店.
- 加賀野井秀一・前田英樹・立川健二. 1993. 『言語哲学の地平—丸山圭三郎の世界—』夏目書房.
- 亀井 孝. 1970. 「ソシユールへのいざない」『中央公論』pp.174-187. 中央公論社.
- 柄谷行人・丸山圭三郎. 1980. 「対話 ソシユールと現代」『現代思想 特集：ソシユール』第8巻、第12号、pp.148-175. 青土社.
- 加藤重広. 2007. 「ソシユールから語用論へ」『月刊 言語』2007年5月号、pp.40-47. 大修館書店.
- 川本茂雄. 1968. 「構造主義と言語」『言語生活』1968年8月号、No.203. pp.64-72. 筑摩書房.
- 川本茂雄. 1973. 「Signifiéについて—ソシユール瞥見(上)」『現代思想』10月号、pp.46-52. 青土社.
- 川本茂雄. 1973. 「Signifiéについて—ソシユール瞥見(下)」『現代思想』11月号、

- pp.215-222. 青土社.
- 川本茂雄. 1974<sup>a</sup>. 「言語理論と言語論 メルロ＝ポンティへの一つのアプローチ」『現代思想』8・9月号、pp.182-191. 青土社.
- 川本茂雄. 1974<sup>b</sup>. 「喩と像—『言語にとって美とはなにか』憶え書き」『現代思想』10月号、pp.106-115. 青土社.
- 風間喜代三. 1978<sup>a</sup>. 「ソシユール『覚え書』の位置」『月刊 言語』1978年3月号、pp.14-21. 大修館書店.
- 風間喜代三. 1978<sup>b</sup>. 『言語学の誕生』岩波新書.
- 木股知史. 2005. 「心・言葉・イメージ」『月刊 言語』2005年7月号、pp.56-63. 大修館書店.
- Koerner, E.F.K. 1973. *Ferdinand de Saussure*. Friedr. Vieweg, Sohn GmbH, Braunschweig. (山中桂一訳. 1982. 『ソシユールの言語論』大修館書店.)
- Kristeva, Julia. 1977. *Du sujet en linguistique*, in Polylogue. Ed. du Seuil. (小松英輔訳. 1980. 「言語学の主体について」『現代思想 特集：ソシユール』第8巻、第12号、pp.189-210. 青土社.)
- 小林英夫. 1932. 「ランゲージュの概念の疑義解釈」東京大学国文学研究室編『国語と国文学』第9巻、第7号、pp.1-23. (小林英夫. 1935. 『言語学方法論考』三省堂. ならびに1976. 『小林英夫著作集1 言語学論集1』みすず書房. にも再録)
- 小林英夫. 1935. 『言語学方法論考』三省堂.
- 小林英夫. 1937. 『言語学通論』三省堂.
- 小林英夫. 1948. 『言語学の基礎概念』振鈴社.
- 小林英夫. 1976<sup>a</sup>. 「国語学と言語学」『小林英夫著作集1 言語学論集1』 pp.309-365. みすず書房.
- 小林英夫. 1976<sup>b</sup>. 「文法論総説」『小林英夫著作集1 言語学論集1』 pp.367-484. みすず書房.
- 小林英夫. 1977. 「翻訳の問題」『小林英夫著作集3 言語学論集3』 pp.409-449. みすず書房.
- 小林英夫. 1978. 「日本におけるソシユールの影響」『月刊 言語』1978年3月号、pp.44-49. 大修館書店.
- 釘貫 亨. 2006. 「ソシユール『一般言語学講義』と日本語学」松澤和宏編. 2007. 『SAUSSURE et LA SCIENCE DES TEXTES ソシユールとテキストの科学』 pp.119-136. 名古屋大学大学院文学研究科.
- 国広哲弥. 2006. 「ソシユール構造主義は成立しない」『日本エドワード・サピア協会 研究年報』第20号、pp.17-22. 日本エドワード・サピア協会.
- 町田 健. 2004<sup>a</sup>. 『ソシユールのすべて 言語学でいちばん大切なこと』研究社.
- 町田 健. 2004<sup>b</sup>. 『ソシユールと言語学』講談社.
- 町田 健. 2007. 「ソシユールの継承者—イェルムスレウと「言理学」」『月刊 言

- 語』2007年5月号、pp.66-73. 大修館書店.
- Martinet, André. 1960. *Eléments de linguistique générale*. A. Colin, Paris. (三宅徳嘉訳. 1972. 『一般言語学要理』 岩波書店.)
- 前田英樹. 1978. 「ソシユールと“言語過程説”」『月刊 言語』1978年3月号、pp.50-55. 大修館書店.
- 前田英樹. 1979. 「言語における行為と差異—再びSAUSSUREと時枝をめぐって—」日本フランス語学研究会編『フランス語学研究』第13号、pp.56-66. 日本フランス語学研究会.
- 前田英樹. 1989. 『沈黙するソシユール』山本製本所.
- 丸山圭三郎. 1970<sup>a</sup>. 「構造主義と言語学(上)」『英語教育』1970年1月号、pp.32-35. 大修館書店.
- 丸山圭三郎. 1970<sup>b</sup>. 「構造主義と言語学(下)」『英語教育』1970年2月号、pp.34-37. 大修館書店.
- 丸山圭三郎. 1971<sup>a</sup>. 「ソシユールにおける体系と概念と二つの〈構造〉」『理想』第456号、pp.26-43. 理想社.
- 丸山圭三郎. 1971<sup>b</sup>. 「Signe linguistiqueの恣意性をめぐって」フランス語学研究會編『フランス語学研究』第6号、pp.13-24.
- 丸山圭三郎. 1971<sup>c</sup>. 「ソシユールにおけるパロールの概念—主体と構造の問題をめぐって—」『中央大学文学部紀要』第29号、pp.19-70. 中央大学文学部.
- 丸山圭三郎. 1973. 「ソシユールにおけるパロールの概念 主体と構造の問題をめぐって」『現代思想』10月号、pp.72-92. 青土社.
- 丸山圭三郎. 1974<sup>a</sup>. 「ソシユールと構造主義」『英語青年』第63巻、第4号、pp.6-7. 研究社.
- 丸山圭三郎. 1974<sup>b</sup>. 「メルロ=ポンティとソシユール 語る主体への帰還」『現代思想』8・9月号、pp.192-204. 青土社.
- 丸山圭三郎. 1975<sup>a</sup>. 「ソシユール研究ノート シーニュの恣意性をめぐって」『現代思想』6月号、pp.124-133. 青土社.
- 丸山圭三郎. 1975<sup>b</sup>. 「ソシユール ソシユールをめぐる謎」『月刊 言語』1975年7月号、pp.82-87. 大修館書店.
- 丸山圭三郎. 1976<sup>a</sup>. 「言語における《意味》と《価値》の概念をめぐって」『中央大学文学部紀要』第37・38号、pp.87-140. 中央大学文学部.
- 丸山圭三郎. 1976<sup>b</sup>. 「言語学的記号と言語記号」『現代思想』10月号、pp.169-177. 青土社.
- 丸山圭三郎. 1977<sup>a</sup>. 「ソシユール『一般言語学講義』」『月刊 言語』1977年5月号、pp.14-15. 大修館書店.
- 丸山圭三郎. 1977<sup>b</sup>. 「貨幣と言語記号のアナロジー」『現代思想』1977年10月号、pp.77-89. 青土社.
- 丸山圭三郎. 1978. 「『一般言語学講義』の基本概念」『月刊 言語』1978年3月号、



- pp.2-13. 大修館書店.
- 丸山圭三郎. 1980. 「ソシユール・その虚像と実像」『現代思想 特集：ソシユール』第8巻、第12号、pp.84-102. 青土社.
- 丸山圭三郎. 1981. 『ソシユールの思想』岩波書店.
- 丸山圭三郎・竹内芳郎. 1982<sup>a</sup>. 「言語・記号・社会—『文化の理論のために』と『ソシユールの思想』をめぐって—」『思想』3月号、pp.1-35. 岩波書店.
- 丸山圭三郎. 1982<sup>b</sup>. 「一般言語学講義」『国文学』6月号、pp.16-17. 学灯社.
- 丸山圭三郎. 1983<sup>a</sup>. 「ソシユールとチェス」『言語生活』1983年1月号、No.373. pp.17-27. 筑摩書房.
- 丸山圭三郎. 1983<sup>b</sup>. 『ソシユールを読む』岩波書店.
- 丸山圭三郎. 1984<sup>a</sup>. 「〈現前の記号学〉の解体」『思想』4月号、pp.30-54. 岩波書店.
- 丸山圭三郎・廣松 渉. 1984<sup>b</sup>. 「記号・意味・物象—構造主義を超えて—」『思想』4月号、pp.164-208. 岩波書店.
- 丸山圭三郎・高橋允昭・篠原資明. 1984<sup>c</sup>. 「デリダの哲学」『理想』11月号、pp.18-66. 理想社.
- 丸山圭三郎編. 1985. 『ソシユール小辞典』大修館書店.
- 丸山圭三郎. 1988. 『言葉・文化・無意識』河合文化教育研究所.
- 丸山圭三郎. 1994. 『言葉とは何か』夏目書房.
- 丸山 静. 1965<sup>a</sup>. 「今週の一冊 吉本隆明著「言語にとって美とはなにか」」『日本読書新聞 縮刷版』7月5日(月). 第1315号、p.5. 不二出版.
- 丸山 静. 1965<sup>b</sup>. 「言語についての考察」『文学』第33巻、第7号、pp.85-96. 岩波書店.
- 丸山 静. 1971. 「言語理論について」『はじまりの意識』pp.88-102. せりか書房.
- 松中完二. 2001. 「認知的言語研究の先駆者としての時枝誠記」『アジア文化研究』第27号、pp.197-211. 国際基督教大学アジア文化研究所.
- 松中完二. 2005. 「時枝・服部論争の再考察 (Ⅰ)—言語研究の原点的問題として—」『敬愛大学 研究論集』第69号、pp.109-146. 敬愛大学経済学会.
- 松中完二. 2006. 「時枝・服部論争の再考察 (Ⅱ)—言語研究の原点的問題として—」『敬愛大学 研究論集』第70号、pp.175-212. 敬愛大学経済学会.
- 松澤和宏. 2003. 『生成論の探究』名古屋大学出版会.
- 松澤和宏. 2004. 「ソシユールの現代性—伝統的な時間をめぐって—」『月刊 言語』2004年12月号、pp.50-53. 大修館書店.
- 松澤和宏編. 2007<sup>a</sup>. 『SAUSSURE et LA SCIENCE DES TEXTES ソシユールとテキストの科学』名古屋大学大学院文学研究科.
- 松澤和宏. 2007<sup>b</sup>. 「ラング概念の誕生とアポリア」松澤和宏編. 2007. 『SAUSSURE et LA SCIENCE DES TEXTES ソシユールとテキストの科学』pp.137-145. 名古屋大学大学院文学研究科.

- 松澤和宏. 2007<sup>c</sup>. 「ソシユール解釈の現在—「一般言語学」とニーベルンゲン伝説を結ぶもの」『月刊言語』2007年5月号、pp.56-63. 大修館書店.
- Mauro, Tullio. 1970. De. *Ferdinand de Saussure Corso di Linguista Generale Introduzione, traduzione e commento*. Nella Universale. (山内貴美夫訳. 1976. 『ソシユール一般言語学講義校注』而立書房.)
- 三浦つとむ. 1968. 「時枝誠記の言語過程説」『文学』第36巻、第2号、pp.37-52. 岩波書店.
- 三浦つとむ編. 1981. 『現代言語学批判 言語過程説の展開』勁草書房.
- 三浦信孝. 1980. 「ソシユール・ヴァレリー・バンヴェニスト」『現代思想 特集: ソシユール』第8巻、第12号、pp.140-146. 青土社.
- 三宅 鴻. 1970. 「ソシユールと人間の学問」『英語文学世界』3月号、第4巻、第12号、pp.20-24. 英潮社.
- Mounin, George. 1968. *Saussure ou le structuraliste sans le savoir*. Seghers. (福井芳男・伊藤 晃・丸山圭三郎共訳. 1970. 『ソシユール』大修館書店.)
- Mounin, George. 1970. *Introduction à la sémiologie*. Bernard-Palissy, Paris. (福井芳男・伊藤 晃・丸山圭三郎共訳. 1973. 『記号学入門』大修館書店.)
- 野村精一. 1974. 「表現としての言語—吉本隆明と時枝誠記の遭遇と交渉」『現代思想』10月号、pp.95-105. 青土社.
- 野村英夫. 1968. 「ソシユールの解釈について—一言語過程説をめぐる—」『文学』第36巻、第2号、pp.53-67. 岩波書店.
- 野村英夫. 1972. 「ソシユールにおける否定的なものについて」『人文論集』第10号、pp.97-141. 早稲田大学法学会.
- 野村英夫. 1973<sup>a</sup>. 「『一般言語学講義』の“序文”」『みすず』第15巻、第8号、pp.16-26. みすず書房.
- 野村英夫. 1973<sup>b</sup>. 「ソシユールの一句をめぐる—“一般言語学”と『一般言語学講義』の問題」『現代思想』10月号、pp.53-71. 青土社.
- 野村益寛. 2007. 「ソシユールから認知言語学へ—記号の文法観の系譜」『月刊言語』2007年5月号、pp.32-39. 大修館書店.
- 大久保そりや. 1967. 「吉本言語論の陥穽—そのナルキッソ的空間について」群遊同人編『芸術・国家論集』第1号、pp.62-76. 早稲田大学新聞会. (大久保そりや. 1970. 『吉本隆明をどうとらえるか』pp.109-140. 芳賀書店. にも再録)
- 大久保忠利. 1966<sup>a</sup>. 「『言語にとって美とはなにか』を解説する」児童言語研究会編『国語教育研究』第8号、pp.148-165. 明治図書出版.
- 大久保忠利. 1966<sup>b</sup>. 「吉本隆明の言語本質観は特異なものであるか」日本文学協会編『日本文学』8月号、pp.8-15. 未来社.
- 大久保忠利. 1966<sup>c</sup>. 「時枝誠記氏のソシユール批判を再検討する」児童言語研究会編『国語教育研究』第9号、pp.129-138. 明治図書出版.

- 大橋保夫. 1973<sup>a</sup>. 「ソシユールと日本 服部・時枝言語過程説論争の再検討 (上) — 「言語は実存体ではない」をめぐる」『みすず』第15巻、第8号、pp.2-15. みすず書房.
- 大橋保夫. 1973<sup>b</sup>. 「ソシユールと日本 服部・時枝言語過程説論争の再検討 (下) — 合理主義のランクと経験主義のランク」『みすず』第15巻、第9号、pp.2-15. みすず書房.
- 大橋保夫. 1978. 「構造とはなにか」『月刊 言語』1978年4月号、pp.46-49. 大修館書店.
- 岡田紀子. 1967. 「言語過程説の再検討」『理想』第414号、pp.37-47. 理想社.
- 篠沢秀夫. 1973. 「言語活動の学の実存的基盤」『現代思想』11月号、pp.207-214. 青土社.
- 神保 格. 1939. 「ソシユールの言語理論について」日本言語学会編『言語研究』第1号、pp.18-38. 三省堂.
- 杉山康彦. 1964. 「言語と文学」『文学』第32巻、第8号、pp.1-18. 岩波書店.
- 杉山康彦. 1966. 「言語の自立性について—吉本隆明における指示表出と自己表出—」日本文学協会編『日本文学』8月号、pp.16-23. 未来社.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris. (小林英夫訳. 1928. 『言語学原論』岡書院.)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris. (小林英夫訳. 1940. 『改訳新版 言語学原論』岩波書店.)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris. (小林英夫訳. 1972. 『一般言語学講義』岩波書店.)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique g énérale*. Paris. (山内貴美夫訳. 1971. 『ソシユール言語学序説』勁草書房.)
- Saussure, F. de. 19 . *Manuscrit du Livre*, from Ms. fr. 3951 (BPU), N9 Linguistique générale (1893-4), N11 Status et motus (1894-5), N12 Status et motus. (前田英樹訳. 1980. 「『書物』の草稿 テキストと註解」『現代思想特集:ソシユール』第8巻、第12号、pp.64-83. 青土社.)
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale (1908-1909) Introduction*. Paris. (前田英樹訳. 1991. 『ソシユール講義録注解』法政大学出版局.)
- Shigeki, Nishiyama. 1978. Saussure 's Linguistic Theories and the Study of Japanese Intellectual History. In Tetsuo, Najita & Irwin, Scheiner. ed. 1978. *Japanese Thought in the Tokugawa Period 1600-1868 Methods and Metaphors* (徳川思想史研究). pp.105-133. The University of Chicago Press.
- 重見一行. 2000. 「日本語の構造と時枝詞辞論—その情緒性について—」『文学・語学』第167号、pp.19-28. 全国大学国語国文学会.
- Slusareva, H. A. 1975. *Теория ДеСоссюра ВСвете. Современное ИДИНГ*

- ВИСТИКИ. (谷口 勇訳. 1979. 『現代言語学とソシュール理論』 而立書房.)
- Slusareva, H. A. 1970. О ПИСЬМАХФ. Де СОССЮРАКИ. А. БОДУЭНУ ДеКУР  
ТЕНЭ. baltistika, VI (1), Vilnius. (村田郁夫訳. 1971. 「ボドウアン・ド・ク  
ルトネへのソシュールの書翰について」『東京経済大学人文自然科学論集』  
pp.36-51.)
- Starobinski, Jean. 1967. *Les mots sous les mots: Textes in édits des cahiers  
d'anagrammes de Ferdinand de Saussure*, in To Honour R. Jakobson,  
Mouton. (工藤庸子訳. 1980. 「ソシュールのアナグラム・ノート」『現代思  
想 特集:ソシュール』 第8巻、第12号、pp.175-188. 青土社.)
- 菅田茂昭. 2007. 「新発見の資料にみるソシュールの意味論—T・デ・マウロ教  
授の講演から」『月刊 言語』 2007年5月号、pp.64-65. 大修館書店.
- 竹内成明. 1966. 「吉本隆明の言語論批判—意味と価値—」『思想の科学』 6月号、  
pp.59-72. 思想の科学社. (竹内成明. 1970. 『吉本隆明をどうとらえるか』  
pp.81-108. 芳賀書店. にも再録)
- 立川健二. 1986. 『《力》の思想家ソシュール』 白馬書房.
- 立松弘孝. 1971. 「言語と認識と対象」『理想』 第456号、pp.1-13. 理想社.
- 田中克彦. 『言語学とは何か』 岩波新書. 1993.
- 田中利光. 1971. 「ソシュールの言語理論に関する若干の考察—『変形文法』理  
論との関連で」『北海道大学人文科学論集』 第8号、pp.1-24. 北海道大学.
- 田中美知太郎. 1966. 「戦争と平和と知識人—興味深い「戦後思想の荒廃」—」  
夕刊読売新聞 1966年9月24日(金). 第31958号、『論壇時評 上』 p.9. 1966.
- 露崎初男. 1972. 「ソシュール理論の限界とその有効性」『大阪商業大学論集』 第  
34号、pp.84-105. 大阪商業大学.
- 時枝誠記. 1941. 『国語学原論』 岩波書店.
- 時枝誠記. 1950. 『日本文法 口語篇』 岩波書店.
- 時枝誠記. 1954. 「詞と辞の連続・非連続の問題」国語学会編『国語学』 第19号、  
pp.1-16. 武蔵野書院.
- 時枝誠記. 1956. 『国語学原論 続篇』 岩波書店.
- 時枝誠記. 1959. 『古典解釈のための日本文法 増訂版』 至文堂.
- 時枝誠記. 1966. 「詞辞論の立場から見た吉本理論」日本文学協会編『日本文学』  
8月号、pp.1-7. 未来社. (時枝誠記. 1970. 『吉本隆明をどうとらえるか』  
pp.141-156. 芳賀書店. にも再録)
- 時枝誠記. 1973. 『言語本質論』 岩波書店.
- 時枝誠記. 1976. 『国語学への道』 明治書院.
- 戸村幸一. 1978. 「ラング・パロールとはなにか」『月刊 言語』 1978年4月号、  
pp.54-57. 大修館書店.
- Waterman, J. T. 1963. *Perspectives in Linguistics*. The University of Chicago.  
(上野直蔵・石黒昭博共訳. 1975. 『現代言語学の背景』 南雲堂.)

- 山内貴美夫. 1970. 「ソシユールと人間科学」『中央公論』1月号、pp.188-199. 中央公論社.
- 山内貴美夫. 1972. 「記号子論:ソシユール理論展開のための粗描」『文学』第40巻、第5号、pp.65-81. 岩波書店.
- 山内貴美夫. 1972. 「ソシユール言語学に寄せて:グロータース氏への反論に代える」『国語学』第90号、pp.125-128. 武蔵野書院.
- 山内貴美夫. 1973. 『言語学原理』而立書房.
- 吉川幸次郎・大山定一. 1974. 『洛中書問』筑摩書房. (別宮貞徳. 1983. 『スタンダード英語講座 [1] 英文の翻訳』 pp.93-104. 大修館書店. にも一部再録)
- 吉本隆明. 1965<sup>a</sup>. 『言語にとって美とはなにか 第一巻』勁草書房. (吉本隆明. 1972. 『吉本隆明全著作集6 文学論Ⅲ』勁草書房. にも再録)
- 吉本隆明. 1965<sup>b</sup>. 『言語にとって美とはなにか 第二巻』勁草書房. (吉本隆明. 1972. 『吉本隆明全著作集6 文学論Ⅲ』勁草書房. にも再録)
- 吉本隆明. 1966. 「私の文学を語る」三田文学会編『三田文学』8月号、pp.5-26. 慶応義塾大学三田文学編集部.